

---

# 遊侠愛歌

夢野楽人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊侠愛歌

### 【Nコード】

N7508V

### 【作者名】

夢野楽人

### 【あらすじ】

俺の名は黄虎<sup>おうこ</sup>、歳は十八、姓はなく華の国に生まれ育った。親の顔は知らないが、幼なじみの紅花とお姫様と楽しく暮らしていた。

ある日、姫に迎えが来て都に行ってしまった。その時俺は八歳。十年後、姫からの文が届き俺は幼い頃の誓いを思い出した。

姫を守る！

そんなわけで俺は華の都をめざして旅に出ることになった。  
師匠や紅花も一緒に少しづいだが、俺はわくわくしていた。  
さあ、俺の冒険の始まりだ！

（電子の巻紙より修正転載しております 作者）

## 1 約束

？わたしを守ってくれる？？

目の前の女の子が俺に聞いた。

？大きくなつて強くなつたら、姫のところに行くよ？

？じゃー約束だよ？

？うん？

俺と姫は小指をからませ約束を交わした。

それは幼い頃の暖かな思い出……

ポカッ！

「いてっ！」

俺はいきなり頭を小突かれた。

「なにを呆けとるか馬鹿弟子が！」

「いきなり殴ることないじゃないですか、師匠！」

「やかましい！ よそ事考えて稽古に身が入るか！」

「うっ……」

返す言葉に詰まると、俺の育ての親でもある琳・白狼は説教を始めた。厳つい顔が更に堅苦しくなり見てると疲れる。

「よいか一瞬の気のゆるみが戦場では即、死につながる。儂が生きのびてこられたのは、鍛錬の賜と友の助けがあったからだ。即ちお前の親父は立派だったのに……お前ときたら稽古は怠けるわ、女の尻を追いかけますわ……」

（いや尻じゃなくて、胸なんだけどー）

とは言い返さず、俺はまた物思いにふけってしまった。浮かれ気分は抜けそうもない。なにせ姫から十年ぶりに文が届いたからだ。別れ際の約束は忘れていない。あの時、俺は八才で姫は六つ。

（あの頃の姫は可愛かったなあー、今はすごい美少女になってるに

違いない、早く会いたいな……げへへへ)

俺は下品な笑いをしながら、文を取り出し読み返す。

『あいたい 私を助けて、都でまってるわ』

詳しくは書かれてなかったが、頼られたからには行かねば男が廃る。決意も新たにしたところで、怒声が耳に入る。

「人の話を聞け！」

師匠は上の空で聞いていた俺をまた叩こうとしていた。そこに助けが入った。

「父さん、黄虎おうこ、早餐（朝食）だよ！」

俺の名を呼んだのは、幼なじみの琳・紅花こうか。

容姿は髪を後でまとめあげ、綺麗な束髪シニヨンを布で包み、長い飾りをつけている。色白で小顔、母親も美人なので将来は期待できるが、近頃胸がでかくなってきたのが残念でたまらない。

俺は貧乳が好きなんだ！

あと俺に対する態度が最近よそよそしい、冷たいと感じる時もある。姫から文が届いた日なんか、滅茶苦茶機嫌が悪かった。昔は三人で楽しく遊んだのに……女の気持ちはよくわからん。それでも俺の世話はやいてくれる。孤児だった俺を育ててくれた師匠夫妻にも感謝だ。長く続いた内乱の中、生きてるだけましなのだから。

内乱が始まった頃、この名もない山村に王族の姫が一人で逃げた。師匠が快く匿い、しばらく一緒に暮らした。姫と過ごした毎日は楽しかったが、やがて迎えが都からやってきて姫は村を去ることになった。その時俺は姫に誓った 姫を守ると！

## 2 旅立

昔を思い出して、うちに修行場から居候宅についた。水瓶から桶で水を汲み、三人で手や顔を洗う。手ぬぐいで拭いた後、家の中に入り、大卓テーブルの前についた。

竹の筵むしろに座り、大皿に盛られた料理を皆で囲んで食べる。いつもながら美味しい、食べ終わったところで美麗めいりさん。紅花の母親が聞いてきた。

「それで黄虎は都に行くの？」

「行きたいですが……」

俺は師匠の顔を伺った。実際行くこうにも道も知らず旅費もない。

手としては、たまーにくる行商人についていくことだが、まずは育ての親の許可を得るのが普通だろう。

「ゆるさん」

「やっぱり」

「……と言いたいところだが、儂も姫から呼ばれている」

「じゃー」

「連れて行く、ただし言うことは聞け」

「わかりました！」

俺は思わず小躍りしかけたが

バン！

「私もいくからね！」

大卓を叩いて紅花が大声を張り上げた。

「えー！ 師匠いいんですか？」

師匠は黙って頷いた。師匠は娘には甘い。

「でも旅となれば命がけだよ。あと野宿とか平気か紅花？」

「あんたに言われたくないわよ！ 私より弱いくせに生意気よ！」

「わかった、わかった一緒に行く。だからそう怒るな」

「怒ってないわよ！」

不思議そうにしている俺を尻目に、紅花は皿を重ねて後片付けを始め、足早に炊事場にかけてこんでしまった。クスクス笑いながら美麗さんが言った。

「黄虎のことが心配で仕方ないのよ」

「えっ！ そうなんですか？」

「ええ、他の女の子に取られ……いえ、騙されたりしないか、とかね。盗賊や獣だけが危ないわけではないのよ」

「……確かに旅先で美少女にでも迫られたら……」

「まあ、あの子も意地っ張りだから守ってあげて」

「はい、じゃ紅花を手伝ってきます」

黄虎も炊事場にむかうと、美麗は夫に話しかけた。

「……二人には村で平和に暮らしてほしかったけど、どうやら無理のようですわね」

「ああ、結局この世はままならぬ。それでも生きてなにか遺せたら、少しは満足できる人生になるのだろうな。黄虎の両親のように……」

「あの最後の時、二人は笑ってましたわ」

「ただ儂には生き残った罪悪感しか残らなかった」

「もついいんじゃありませんか？ ご自分を許しても」

「そうかな……そうだな、またやることも出来たしな」

「ええ」

夫婦は笑いあった。

出立の日、村民全員が見送りに集まった。

「おねえちゃん、早くかえってきてね」

「紅花、生きてかえってくるんじゃぞ」

「うん、みんなありがとう」

紅花は村の人気者なので皆から声をかけられていた。別れを惜し

み涙を流してる村人も多い。それに嫉妬したわけではないが、俺は怒りを爆発させた。

「だあー！ やつてられっかー！」

ドカ！ ドサ！ バーン！

俺は担いでいた荷物を地面に放り出した。

「ちよつと、壊れたらどうするのよ！」

「うるせー！ こんなに大荷物もって旅にいけるか！」

帳幕テントはともかく衣装箱、化粧品棚と紅花の物全部が俺に持たせられた。どだい運ぶのは無理なので腹が立つ。

「引越するなら馬か牛、それと荷車くらい用意しろ！」

「なによ、男のくせに！ それくらい持ちなさいよ！」

うー！

顔をつきあわせていがみあつてると、美麗さんが割って入った。

「紅花、あんまりやりすぎると嫌われますよ」

「……だつてー」

困った顔をしながら、美麗さんは霊符を数枚取り出した。それを俺がまき散らした荷物に貼っていく。そして印を結び祝詞を唱えた。

「父祖に願ひ奉らん、黄泉の道よ一時開かん！」

霊符に穴が開き、荷物がそれぞれ吸い込まれて消えていった。霊符だけが美麗さんの手元を集まる。俺はその束を受け取った。村人達は拍手喝采、流石は最高符術士と呼ばれるだけのことはある。

符術士　もともとは先祖を祀る神職で、黄泉（霊界）との交感を繰り返すうちに様々な力を得た存在。紙などに梵字や図形を描き霊符を作り、黄泉に物を預けるなど様々な事が出来る。

美麗さんは符に“氣”と薬草をかけあわせ、今までに何人も病人を治してきた。俺も剣稽古で怪我したとき世話になった。紅花の



場合は符から小石を俺にぶつけてくる。俺が村の女の子を追っかけてると、必ず石を飛ばしてきて邪魔をする。意地悪な幼なじみだった。

すったもんだで俺達は出発した。目指すは華の都！

「いま行くよ姫！　そしてまだ見ぬ微乳た……」

言い終える前に、大石が飛んできた……。

### 3 山賊

村を出てから早三日。

期待に胸をふくらませていたが……旅は全く面白くなかった。

「ねえ師匠、村巡りしてたら都につくの遅れませんか？」

よその村を見つけては人助けの繰り返し。師匠は色々聞きまくり、紅花は病人の治療、俺は爺さん・婆さん・子供の相手……なんで女がいないんだー！

内乱の後とはいえ人が少なすぎる。わけは後からわかったが、今の俺は不満が溜まる一方で、早く都に行きたかった。

「都に直接向かうと誰が言った？ 黙ってついてこい」

「黄虎、当てが外れて残念だったわね」

「うるせー」

紅花にからかわれて余計腹が立った。そして今日も村に立ち寄りて見たところ、様子が変わった。あちこちから煙が上がり村が荒らされていた。倒れていた村人を見つけ問いかけると、山賊達に襲われたらしい。去った方向を聞き、俺達は走り出した。

「黄虎、紅花、いくぞ！」

「押忍！」

「はい！」

山賊退治の始まりだ、悪党を斬るのにためらいはない。

？武芸は己の身を守り、弱者を助けるためにある？

師匠の教えは正しい。美麗さんも俺達をずっと守ってきてくれた。今度は俺達の番で初めての戦いだ！

足跡をたどり、人の気配がしたところで俺達は身を伏せ息をひそめた。師匠が先行して様子をうかがう。

「洞窟の前に見張りが二人、そいつらを倒したら紅花は後方に回れ、穴から出てきた奴らは儂らでしとめる」

俺と紅花はうなずき動いた。紅花は霊符を二枚放り投げ祝詞を唱えた。符から飛び出たのは飛？（手裏剣）、狙い違わず見張りの喉元に突き刺さり、二人は声も上げずに倒れた。紅花は別な霊符を洞窟内へと放つ、それは硫黄玉で煙に変わり、独特の悪臭が充満していく。俺と師匠は口元に布を巻き、洞窟の前で抜剣して待ち構えた。

「ゲホツ！　ゴホツ！　ぐわっ！」

苦しくなって出てきた山賊を俺は斬り伏せた。師匠は華麗な剣さばきで無駄がなく、一瞬で三人を倒した。残りは一人、そいつは逃げだし俺は後を追う。

紅花は飛？を放つ　ところが運悪く木からの落ち枝に阻まれて当たらない。山賊は紅花に気づき襲いかかった。

「まずい！」

接近戦では符術士の紅花は不利、俺は焦り短剣を取り出し投げつけた。

ヒュン！

山賊の背中に当たった。しかし勢いは止まらず紅花に刃が振り下ろされた！

ドスッ！

音と共に倒れたのは山賊の方だった。見知らぬ男が槍を突き出し、紅花を助けてくれたのだ。俺は胸をなでおろすと、今度はその男が突然倒れてしまった。慌てて駆け寄ると、たまに聞く音がした。

ぐー

「うー……腹が空きもつした」

言ってる言葉が分からなかったので、異国人である事がわかった。

身なりはボロボロで髪ものび放題……体も臭い。それでも恩人なので俺は飯の支度を始めた。

## 4 倭人

「我吃！（いただきます）」

俺達は川辺で食事を始めた。その後、捕まっていた村人達を見つ  
け助け出した。ただ全員腹を減らし弱っていたので、俺と師匠は大  
急ぎで食い物を集め紅花が調理した。紅花の料理は美麗さんゆずり  
で美味い。皆、料理に満足し感謝していた。人心地ついたところで、  
俺と紅花は恩人と話をしていた。

熊青<sup>ゆうせい</sup>

と男は名乗り、倭人だといった。姓は無く俺と同じ、華語は話せ  
るようで会話は出来た。さっきまでは襤褸<sup>ぼんじょう</sup>雑巾、川で体を洗い俺の  
服を着せたら色男。ただ変な喋り方が気になった。

「いやー馳走になりもうした。感謝でござる」

「こつちこそ危ういところを助けていただき、謝謝」

互いに頭を下げあった。

「しかし、倭国つて海を越えて遙か東にある……」

人伝に聞いた話なので国の想像がつかない。なにせ海とやらも俺  
も紅花も見ることがない。

「左様……とは申しても東夷<sup>とうい</sup>（蛮族）でござる」

俺が変な顔をしたので、熊青は言いよんだ。

「すまん軽蔑したわけではない。海を越えるのは命懸けと聞いてい  
たから、そこまでして華の国まで来たのはなぜか？ と思っただ」

「いやいや大した理由はござらん。戦に敗れて逃げてきただけのこ  
と。拙者、落武者でござる」

「戦か……」

（どこの国もやることは同じか……華人も野蛮人と変わりない）

俺は戦は大嫌いだ。蓄のまま散っていく少女達がいるかと思

うと悲しくて仕方ない。

なんてもつたいない！

「なるほど、ちなみに倭人の女子は……ぐっ！」

聞き終える前に紅花から肘でどつかれた。

「それで熊青さんはこれからどちらに？」

「あてはござらん、都とやらに行きたいと思うのだが道が……」

「でしたら私たちと一緒に行きましょう。父には私から頼んでみます」

「それはかたじけない、お頼み申す」

こうして熊青が友人になった。

その後は襲われた村に戻り、住めるように立て直した。男達には武芸を教えて村の防備も強化した。また襲われたとしても今度は撃退出来るだろう。山賊は弱い者にはつけあがるが、いざ立ち向かわれると逃げ出す腰抜けが多いからだ。

それにしても熊青は強かった。木剣と棒で仕合ってみたが、俺は歯が立たず師匠でさえ五分。間合いに差があるので不利なのは確かだが、熊青の動きは巧妙で隙がない。ただ本気の勝負なら俺もあらゆる手を使つて勝つ！俺は負けず嫌いだった。

村を後にすると師匠の様子が変になった。村々で人さらいが横行してる事が分かったせいなのか？それとも何かの足跡を見つけたからなのか？

とにかく顔が険しくて近寄りがたい。

「都にむかう」

と言つたきり無口になり、紅花もただ一言。

「今はそつとしておいてあげて」

俺は黙っていることにした。それよりようやく都の玄関口たる遠吠駅（宿場町）に着いて俺は浮かれていた。

## 5 鬆獅狗

「これは凄い！」

俺はおのぼりさん。駅を生まれて初めて見て興奮していた。石造の門や壁、商店も多く賑わい活気にあふれていた。

そして待望の美少女達もいた……が、手は出せない……しくしく。

なぜなら駅を仕切っている侠がいるからだ。乱暴者が外に叩き出されるのを間近で見だし、師匠からも釘を刺されていた。

「駅の中ではおとなしくしてる！」

(くっ！ 楽しみは都までとっておくさ！)

俺は心の中で負け惜しみをほざきながら、女子を見るだけで我慢していた……でもやっぱり胸にさわりてー！

不埒なことを思いつつ師匠についていくと、駅の中央にある大きな店についた。

『獅子大酒店』（ホテル）

店の中は人でごった返していた。飯店と宿屋を兼ねているので無理もない。まあ、ここにも侠がいるから治安は万全。ふいに師匠が口を開いた。

「何か食べてろ、儂は知り合いと話しをしてくる」

師匠は近くにいた侠の一人に話しかけた。

「獅子……いや、鬆獅狗チャウチャウに会わせろ」

その言葉に侠は真っ青になりつつも上に報告しに行った。ほどなく師匠は剣をはずけ連れていかれた。俺達は気にもせず、菜单メニューから料理を選んでいた。

白狼は二階の客間に通され椅子に腰を下ろしていた。その前には大男が一人座っていた。女侍者が杯に酒を注いで拝礼し下がると、二人は杯を上げて再会を祝した。

「何年ぶりだ白狼？ 文が届いた時は驚いたぞ」

「侠の頭目 獅子は言った。顔はまさにチャウチャウだった。」

「あれ以来だ、世捨て人を気取っていたが姫に呼ばれた」

「あの姫さんか、あれはかなり強かだぞ。最後の王族だけのことはある。それはいいとして用を聞こう」

「ああ、頼みがある」

しばらく二人は話し込む、そして話題がある事になると二人は神妙な面持ちになった。

「鬼獣……やはり間違いないか？」

「ああ、手下からも見かけたと報告があった。まだここは襲われておらんが、あれが来たら一溜まりもない。情けないが逃げる事しか出来ん。こんな時、あいつさえ生きてくれたら……すまん、愚痴だな」

「いや……だが、かすかな希望はある。やつの息子がいる」

「なにっ！」

獅子は慌てて壁窓を開いた。そこから一階を一瞬して黄虎と紅花を見つけた。

「隣にいるのはお前の娘だな、若い頃の美麗にそっくりだ」

「まあな」

「……しかし、女の胸ばかり見ている軽薄そうな奴だな、あいつの性格とは真逆じゃないか……あれで役に立つのか？」

「なんともいえん」

「少し試してみるか」

獅子は酒のつまみの豆をとり、一人の女侍者ウェイトレスに向かって投げつけた。女侍者はそれを躲して獅子を睨み付けた。獅子はただ黄虎を指さし、女侍者は踵をかえして向かった。

「以心伝心……お前の娘か？」

「まあな、ただ女だてらに侠なんぞになりやがって、嫁の貰い手があるか心配だ」

「戦斧を振り回し恐れられた黒獅子も、娘には甘いか」

「ぬかせ！　さんざん鬆獅狗よばわりして馬鹿にしゃがって！　その名を口にして五体満足なのはお前くらいだ」  
「なるほどな、それで俠達が怯えていたか。しかし、あの娘……」  
「お前の娘も……」  
二人は同時に喋った。  
「お前に似なくてよかったな！」  
「余計なお世話だ！」

それからしばらく親馬鹿達の娘自慢が続いていた。



## 6 黒蘭

師匠の笑い声が聞こえたような気がして、そっちに顔を向けると女の顔が目の前にあった。

「うわっ！」

俺はびっくりして倒れそうになった。

「当店自慢の月餅です」

短めの髪でつり目の女侍者が卓においた。

「あれ？ 頼んでないよ」

「お客さんが気に入ったから、私からのおごり」

「ありがとう、俺の名は黄虎」

「あたいは蘭、姓は黒。それで黄虎はどっから来たの？」

「西の方にある名もない山村さ……じー」

「ふーん……て、あんたどこ見ながら喋ってるのさ？」

「すまん、眼が勝手に見ちまうんだ。田舎もんだから勘弁してくれ」

蘭は<sup>エプロン</sup>围裙をつけているので胸の大きさはわからない。俺には小振りに見えて目が離せなかった。

「興味があるなら触ってみる？」

「えっ！ いいの？」

「ええ……」

今紅花は手洗いで席を外しており、熊青は見ても見ぬふりをしてくれている。まさに絶好の機会！ 俺は震えながらゆっくり右手を伸ばす……もうちよい……あれ？ 体が勝手に止まった。

変だと思いつつ蘭の顔をよく見ると……薄く染めた唇が上がっていた。笑い顔だが目は獲物を狙う獣！

（こいつ、やる気か！）

俺は殺気に気づいて慌てて手を引っ込めた。

「……どうしたの？」

「やめとく、連れが戻ってきたら怖いから」

「あーら残念、腕をへし折ってやるうかと思つたのに」

( やっぱりな、美麗さんが言つてた通り『女には棘がある』か )  
蘭は悪びれず眼を細めて感心してるようだった。

「黄虎と言つたわね、本当に気に入つたわ」

ふいに蘭の顔が近付いたかと思うと、額に柔らかい物が当たる。

「えっ？」

俺は一瞬なにをされたか分からなかった。戸惑う俺を尻目に蘭は立ち去っていく。

「またね黄虎」

俺は額に手を当て呆然としていたのも束の間。

「黄く虎く！」

黄泉の国から声が届いたような気がした。恐る恐る振り返れば憤怒の形相をした紅花、俺は蛇に見込まれた蛙。

「あの女に何したのよ！」

「なっ、なにもしてねえーよ！」

( どうやら紅花はよく見てなかつたらしい、誤魔化すしかない！ )

「嘘！ 顔が重なつてたわよ！」

「気のせいだろ」

胸ぐらをつかまれ、俺は額を手で隠すので精一杯だった。

「まあまあ紅花殿、黄虎殿は何もしてないでござる」

( おお！ 熊青先生ありがたい )

熊青の一言で紅花は手を離れた。しかし次の一言が余計だった。

「あの女が黄虎殿の額に接吻キスマークしただけでござる」

すかさず、手がどけられ接吻痕が露わになった。

( ああ熊青先生……正直に言つたら最悪ですよ…… )

腕は折られずに済んだが、半泣きの紅花からボコボコにされた。

俺は何もしてないのになぜだあー！

## 7 仮面

俺達は一晩だけ店に泊まり早朝には駅を後にした。都まではあと少し、師匠は道を急ぎ夜には野宿をした。帳幕は紅花が独占……文句を言ったら噛みつかれた。結局、男三人交代で不寝の番となった。

朝、俺は剣を抱えてうとうとしていると、まぶしい光が目に入ると同時に剣を構えた影が見え、きらめく白刃が俺に振り下ろされた。

ブン！

俺はかぶっていた毛氈もうせんを投げつけてかわす。攻撃してきた奴は逃げ出し俺は後を追った。何も無い所までくると、奴は逃げるのを止めて振り返る。そして見た物は……仮面。

鬼の面をつけたそいつは雨衣カッパを身につけ体をかくし、特徴がわかりづらい。刺客というやつか？

俺が戸惑っていると仮面野郎は攻撃を仕掛けてきた。剣を片手一本で連続で突いてきた。俺はその戦法に面食らいながらも、なんとか防いでいた。しばらくすると、仮面野郎は一旦間合いを離れた。すると仮面が一瞬で変面し、俺をあざ笑うかのように冷笑顔になった。

「てめーこの野郎！ 馬鹿にするな！」

俺は怒りにまかせて斬りかかるが当たらない。それどころか反撃を受けて傷をおった。

(くっ！ これくらいへっっちゃらだ！)

やせ我慢したものの仮面野郎は戦法を変え、切り払いと假動作フェイントをおりませ手がつけられない。刺突も早くなり細身の剣がいくつにも見えた。俺はやられっぱなしだった。

そこに紅花が血相を変えてかけつけて来た。

「黄虎ー！」

すかさず符を投げようとするが、師匠が腕をつかみ止める。

「氣を使え、黄虎！」

「もつと間合いを離すでござる！」

「押忍！」

二人からの助言で俺は少し冷静になる。まずは足さばきを変えて仮面野郎の周りを回り始めた。効果てきめん、野郎は直線的な攻撃しかしないので横にずれれば当たらない。そして俺は呼吸法を変え内氣を練り始めた。

氣 万物の根源は元素、精神の根源は氣である。氣は見えざる力なり。内氣法は体内で練る事により力を生み出す。また、自然から氣を集める外氣法というものもあるが扱いは難しい。

後は一方的だった。内氣で身体能力を上げた俺に仮面野郎はついてこれない。俺は常に後ろに回り込んで切りつけ、野郎はズタズタになっていく。それでも体勢を立て直し渾身の一突きを俺に放つ！  
ギン！

俺はそれを素手で弾き返した。氣で強化した体は鎧より硬い。俺は止めを刺すべく劍を振り下ろす。そこに師匠の声が聞こえた。

「いかん！ 殺すな！」

（えー！ 止まんねえーよー）

寸止めは出来ない。劍が仮面に食い込む！

キン！

すんでの事で熊青の槍が俺の劍を跳ね上げ、同時に身体が縛られ後ろに引つ張られた。紅花の投げ縄符だった。

（止めてもらったけど……なんか納得いかねーこいつ敵だろ？）

仮面野郎は劍を鞘に収め下におき降伏した。破れた雨衣を脱ぎ捨て仮面を外して素顔を晒す 女！？

蒼い瞳に金色の髪、俺は驚きその美しさに見とれた。西欧人とい  
うのは後から知った。そして女はひざまずいた。

「ご無礼お許しください、わたくしは緋蓮ひれんと申します。姫様がお待  
ちです」

## 8 再会

「こいつを見極めるのに、闘ってみたか？」

俺を指さし師匠は歩きながら緋蓮に問いかけた。

「はい、従者の身で出過ぎた真似とは思いましたが、姫様が毎日のように話される黄虎様が本当に信頼できる方か不安でした」

「うむうむ、わかるぞ。こいつの見た目はかなりだらしないからな」

「師匠それはないですよ」

「だがな、軽はずみに命をかけようとするな！ 自分だけ満足しても残された者には失った辛さしか残らん。お前が死んだら姫が悲しむ」

「申し訳ございません……お言葉肝に銘じます」

緋蓮は涙を浮かべて謝った。俺はもう責める気はない、案内がてらに身の上を聞いたら元奴隷で姫に救ってもらったそうだ。

（やっぱり姫はやさしいな）

そして都が見えてきた。

「……嘘だろ」

俺は衝撃を受けた。外城で目にしたものは荒れ果てた街と、痩せこけた人達……都は廃墟と化していた。

（村の方が全然ましじゃないか！）

俺は内乱の惨状にあ然としながら緋蓮について行く。気がかりなのは姫の安否だけ。

（食べ物はあるのか？ 病気にしてない？ 住んでる所は？）

姫が心配でたまらず早く会いたかった。やがて内城にたどり着く、そこも城壁はおろか城門も<sup>おしり</sup>壊城もない。宮殿も見当たらず地面に跡があるだけだった。

ただ、そこに暮らしている人達はたくさんいた。城の石垣を椅子や竈にして使い炊事している。近くには川の水を引き込んでの洗濯場、そして畑もある。ここは城の中の村。

「これは見事」

師匠はしきりに感心していた。姫は城を開放して難民達を助けていたのだ。俺も姫の思いやりに感動した。

（姫はどこだ？）

俺は緋蓮に居場所を聞こうとしたが見当たらない。

（どこいった？）

緋蓮は倉に入っていくところだった。それはボロい建物で中から声が聞こえてくる。

「緋蓮よかったー！ 心配したんだからね……グス」

「すみません勝手なことをいたしました」

「もう無茶しちゃ駄目だからね！」

「はい二度といたしません。それで黄虎様をお連れしました」

「えっ！ 来てるの？」

「はい外に……」

ボタン！

扉が勢いよく開け放たれた。そして姫が駆け寄ってくる。

三つ編みが揺れている。つぶらな瞳に薄い唇……別れた時と変わってない可愛い笑顔……背は少し伸びたかな……俺は手を広げて姫を迎える……えっ？

姫が近づくと俺の顔が強ばる。見た物を信じたくなかったからだ。

「黄虎ー！」

姫が俺に抱きつく

胸に巨乳が押しつけられた時、俺の意識は飛んだ……。

## 9 計画

「えー！ そうだったんだー」

「そうそう、だからね……」

「くすくす」

女三人寄れば姦しい、倉からの声は外まで響いていた。

姫との再会の後、俺はつくり笑いをしたまま固まり、色々聞かれ  
ても生返事しか出来なかった。

（姫は綺麗になった、更に可愛くなった。でも……なんでなんで胸  
がでかいんだー！）

夜にはささやかな宴をひらいた。紅花も最初は姫に対して頑なだ  
ったが、すっかり打ち解けた……女同士もよくわからん。そのまま  
女三人は倉に入り、男三人は外で過ごす。

「時の流れは無情だ……幼い頃の思い出はすべて幻」

黄昏れてる俺に師匠は言った。

「何を世迷い言をほざいておる。外に出れば楽しい事があるなどと  
思っていたのが、そもその間違いだ」

「でも師匠、あの胸はどう見ても反則ですよ」

「そうかー？ 儂的には情欲をそそるものが……って何を言わせる  
！」

「はあー……まあー……もうーどうでもいいっす」

「まあまあ黄虎殿気を落とさずに、まずは一献」

「あんがと……くすくす」

熊青から注がれた酒は涙酒、それを呷あおって俺は寝た。

「それで白狼師、これからどうなさるおつもりか？ 拙者はどんな

ことでも助太刀つかまつるが……」

「ありがたいが、これからは命をかける事になる。どこかに逃げ…



…」

熊青は続く言葉を手を出して止めた。

「お気遣いは御無用、故国から逃げて更に逃げる所などござらん。この華の国で散るならそれが運命でござる」

「……そうか、だがお命は大事になされよ」

「わかり申した。ところで白狼師お願いがあるのだが……」

「それはかまわん大した事ではない。しかしなぜに？」

「拙者もやはり命は惜しいでござるよ、生き延びるために会得したいと思つたまでの事。それに希望は零ではないのでござるう？」

「こいつがその希望だが……絶望の間違いかもしれん」

「うーん、うーん、おつきい乳が迫ってくるよー!!」

俺は悪夢に苛まれていた。

翌日、俺は二日酔いで紅花から薬をもらい皆との会合に出た。そこで姫から内乱末期の一部始終を聞いた。

「わたしが都に戻った時、内乱は泥沼になっていたわ。もう軍隊もないのに刺客をやとつて、王族同士の殺し合いが続いていたの。わたしも何度も襲われたわ、妾の子にすぎないのにねーくすくす」

姫は自分をあざけるように続けた。

「王族が毎日死んでいったわ。みんな狂つてたんでしようね、結局残ったのは私と叔父と叔母の三人。それで和解と一緒に食事することになったけど、叔父・叔母とも互いに毒を盛つて死んだわ……わたし？ 二つの毒料理を同時に食べたお陰で助かったみたい。くすくす」

あまりの痛ましさに俺達は何も言えなかった。

「こうして、わたくしこと繭姫は一人生き残りました」

パチパチ

一人で手を叩く姫を見て、俺は気の毒に思つた

(辛かつたんだらうな……姫の心は病んでしまったのか?)

姫の乾いた笑いを聞く度にそう思う。だけど姫はたくましさも身につけたようだった。

「まあ昔のことなんてどうでもいいんだけどねー、今を生きて食べなきゃだめね。それでみんなにお願いがあるの……」

姫の計画を聞き俺は吃驚仰天した。

## 10 武術大会

「ああ……俺は何しに都に来たのだろう？」

都についてから数日が過ぎ、俺は愚痴ばかりこぼしていた。そして仕事を怠けていると親娘から怒声が飛んでくる。

「さばるな！」

「黄虎、早くしなさい！」

「はい、はい」

生返事で俺は仕事を再開した。

『武術大会の開催』

姫が考えた国の復興計画。まずは兵隊と金を集めることが目的だった。もつとも姫には資金も人員も無いので鬆獅狗から金を借り、俺達为中心になって大会の準備をしている最中だった。

師匠は現場監督兼客席作り、階段式で本格的だった。

紅花は霊符で資材を運び、熊青と緋蓮はあちこちの手伝い。

姫は炊き出し、俺は武舞台作りをしていた。

土を運び盛って固める作業の繰り返し、難民達も手伝ってくれて助かっている。ただ時間がないので突貫作業が続いていた。この間に狭達が村々を回って、開催告知の立札を立てていた。

内容は以下の通り。

三ヶ月後に武術大会を行い、優秀な成績を上げた者には武官の地位を与え、都か郷里で勤める事が出来る。

又、武術大会において淘汰制本戦トーナメントに勝ち進んだ者には上級官位と百金を、優勝者には値千金の国宝を与える。

俺は一つの疑問を姫に聞いた。

「国宝なんてあるの？」

「ないわ、奪い合って全部壊れたわ」

「……」

「気にしないでいいわよ黄虎、これは鼠を誘う餌なんだから」

裏の計画は聞いていたが、改めて姫は凶太いと思った。

そして三ヶ月が経つと都は人であふれかえっていた。町中は竹笛・編鐘・太鼓の音でやかましい、それ以上に大きな歓声があちこちであがっている。武術大会予選が始まったのだ。

俺は武舞台作りの後、休む間もなく予選の審判員をやらせている。しかも本戦出場も言い渡され、げんなりしていた。師匠命令と姫の頼みでは是非もなし。

（面倒くさいから出たくないんだけどなー）

予選は腕相撲・相撲・駆け競べの三つの競技で、参加者を篩い落としていく。俺は審判というよりはなだめ役。落ちてごねた奴を言い聞かすのが役目で、場合によっては叩きのめす。

またいざこざが起きた。これは明らかに一人がズルをした。駆け競べの最中、腕を突然伸ばして競争相手を倒したのだ。外野は非難の嵐、ただ俺は別な断を下した。

「腕をよけられない奴が悪い、これは武術大会だ！」

騒ぎは収まったが、駆け競べはなんでもありの格闘になってしまった。

「話せるなあー兄ちゃん」

ズルをした髭面の巨漢が俺に話しかけてきた。

「別にあんたを鼻履したわけじゃない、弱そうなのを本戦前に外したまでだ。大怪我するだけだからな」

「ほうー強さがわかるのか？」

「ああ、あんたは相当強いな」

氣を集中させて見れば強さは分かる、こいつは師匠並に強い。

「がははは！ 気に入ったぞ小僧！ 俺は<sup>むじな</sup>貉、また会おうや」  
貉は豪快に笑いその場から立ち去った。

予選は終わり、本戦の組合せがくじ引で決められた。  
三十二人、十六組の一回戦は俺と貉の対決だった。

「がははは！ また会ったな小僧。一丁もんでやるか」

朝一番にむさい髭面のおっさん相手ではやる気もでないが

「黄虎！ 負けちゃ駄目よー！」

姫に応援されたからにはやるしかない。

貉は二本、俺は一本の木剣を手に持ち、仕切り線の前で構えた。  
ジャーン！

銅鑼の合図と共に試合が始まった。貉は動かない、力任せに攻めてくると思っただが冷静で全く隙がない。やはり達人級の腕がある。

(こりゃー長期戦じゃ勝ち目がないな)

だったら氣を練つての一発勝負……よし、いくぞ！

俺は少し下がり前に突進した ように観客からは見えただろう。

実際は『縮地法』を使い貉の背後に回り込んでいた。師匠直伝のこの技は氣を足に集中させ、土の氣の上を滑るように駆けるのだ。俺は四丈(約10m)を瞬時に移動し、木剣を貉に振り下ろした。

ガッツ！

木と木がぶつかった。貉は前を向いたまま木剣を後ろに傾け、俺の攻撃を防いだ。

「ちっ！ やっぱり甘くないか」

「おお！ 縮地か おしかったな」

言うなり貉の巨体が消えた。俺は殺氣を上から感じ、木剣の両端を持って掲げた。ドン！ ほぼ同時に両手が痺れ腰が砕けそうになる。貉も縮地で上段攻撃をお返ししてきたのだ。

「もう一つ剣はあるぞ、おわりだ小僧！」

俺のから空きの胴に木剣が迫る！

「くっ！」

俺は地面の氣を蹴り、木剣を軸に逆上がりして宙に舞った。ついでに猪を蹴ったがたいした痛手にもならないだろう……と思っていたら猪はよろよろと場外へと落ちていった。

「勝者、黄虎！」

審判長の師匠が判定をくださった。

ウオー！

歓声は俺の耳には聞こえなかった。

（あのおっさん勝負から逃げやがった……これは俺の負けだな）

なにせ猪の姿が見当たらない。俺は悔しさを抱きながら控え席に戻ろうとした。

そこに

「あんたやるわね」

うつむいていた顔を上げると、胸当てをつけた黒蘭がいた。

「蘭も来てたのか」

俺は蘭の胸を見ながら言った。

「ったく、どこ見てるのさ……けど、あんたやっぱり強いわ、あたし好みで悪くない」

「あんがと、でも今の試合は俺の負けだ」

「それがいいんだよ、見栄をはるだけの男よりましさ　さてあたしの出番だな」

蘭は武舞台に登っていった。女の登場で野次と冷やかしがうるさく、対戦相手も舐めてかかっていた。

「あれ？　蘭のやつ得物を持ってなかったような？」

気づいた時には勝負は決まっていた。

バキッ！　ボキッ！

「ギャー！」

蘭は素手で相手の骨を折っていた。

（徒手　拳術の使い手かよ、こえー！）

拳術家は腕があれば剣士をしのぐ、蘭は追い打ちをかけようとしたので、師匠が慌てて止めに入った。

「そ、それまで！ 勝者、黒蘭！」

静まりかえった外野を尻目に、蘭は悠然と戻って来た。

「あつ！ 次は俺とあたるのか！」

組み合わせをまともに見てなかった俺は焦った。

「いんや、そうはならないよ」

午後からの二試合目、蘭は棄権した。



## 12 決勝戦

大会二日目、午前の試合で残ったのは四人。そのうち熊青と緋蓮が棄権したので午後から決勝戦になってしまった。これも計画の内だが、なんか俺に隠してる事があるような気がする。なにせ俺も棄権するはずだったが師匠に駄目出しされた。結局、俺が決勝戦で戦うのは……紅花。

「黄虎！ 本気できなさいよ！」

紅花は全試合一瞬一本勝ち、霊符で相手の死角から石をぶつけて倒すのはズルいような……戦法と言えばそれまでだ。俺も気乗りせず、嫌々武舞台に上がった。

「男と女……のきっかけにでもなれば……あるいは」

「えっ！ 師匠なんかいいました？」

「気にするな、では両者始め！」

紅花が符を取り出すと同時に、俺は目を閉じた。

「飛石弾！」

かけ声と共に石が飛んでくる

カン！

俺は眼をつむったまま木剣で石を弾いた。休む間もなく次々石が飛んでくるが、全て避けるか防いでみせた。

「よっ！ はっ！ それ！」

「おおー！」

観客から歓声が上がった。俺としては紅花といつもやってる事なので大した芸当ではない。目に頼らず周りの氣の変化を感じて動くのは朝飯前。

「おいしい！ どっこい！ 残念！」

「……」

俺は調子に乗りすぎて観客達が白けてきたのに気づかなかった。

歓声が野次に変わった時には遅かった。

「假球（八百長）！」

「真面目にやれ！」

（しまった！ 試合中だった）

俺は殺気だつてきた観客達を抑えようと叫んだ。

「まてまて！ これにはわけがある！」

周りは一先ず静かになった。

「今、闘っている紅花とは幼なじみだ。こいつは生き別れの乳……もとい父を探す為に優勝しようとしている。俺も繭姫に優勝すると誓った。紅花の願いと姫との約束、俺は板挟みで苦しいんだ！」

俺は口からでまかせを言った。

ざわざわ

「それは辛いな」

「まあなんて悲劇なの、しくしく」

（よしよし、同情ひいてなんとか丸め込めそうだ）

「なんと！ そうだったのでござるか！」

（……おい熊青先生、あんたまで本気にしてどうする！）

心の中で突っ込みをいれつつ、次にどうしようかと考えてる内に嘘が暴露された。

「何言ってるの黄虎？ 父さんならそこにいるじゃない」

紅花は師匠を指さした。

（話あわせる！ 空気読めー！）

身振り、手振りで伝えてみても紅花は首をかしげている。あいつは少し鈍いところがあった。

仕方ないので更に嘘を重ねる。

「そうかー良かったなーお父さんが見つかって、しかし病弱なお前の母が気がかりだな、やはり優勝して薬代を稼がないと……」

「母さんなら、村で元気にしてるって文がきたわよ、ほら」

(ああ……その文を見せびらかしますか……終わった)

「嘘つき！」

俺めがけて一斉に物が投げ込まれた。数が多すぎて躲せるものじゃない。俺は逃げだすことにした。

ドン！

ただ逃げた方向が悪く紅花にぶつかり倒れてしまった。

「きゃ！」

「いてて……ん？」

起き上がろうとした時、変な手触りを感じた。

(ぶ厚い布？ はっ！)

見れば俺の両手は紅花の胸を揉んでおり、押し倒された紅花は涙を浮かべて怒り顔になっていた。

「ごめ んー！？」

詫びの言葉と俺の体が宙に舞う、紅花は本気で怒ると馬鹿力を出すのだ。俺は場外で受け身をとリ、すぐに逃げようとしたが……回り込まれた。そして紅花が霊符から取り出したのは棍棒。

正確には二本の洗濯棒で、俺は数知れず叩かれてきた。あやうく死にかけてた時もあったので、それを見ただけで冷や汗が出る。

「よ、よせ、紅花！ 俺が悪かったから許せ！」

「うるさい！」

ヒュン！

洗濯棒が俺の頭を掠め髪が飛んだ。紅花は紐で連結された片方を持って洗濯棒を振り回している。遠心力での汚れ落としが本来の使い方だ。もし人に当たったら大怪我します、はい……洒落になってねー！

俺は必死に逃げるしかなかった。

「まちなさい黄虎！」

「待てと言われて待つ奴はいねえー！」

俺は喋りながらある疑問が浮かんでいた。

（紅花は小さい胸に布を巻いて隠してるんじゃないか？ 何のために？ ……それは俺に迫られるのが嫌だからだろう）

紅花が貧乳かと思うと俺は元気が出てきた。機会があればさわってやるぞー！

一方、師匠はため息と共に頭を抱えていた

「男と女……相声（漫才）にしかならなかったか……はあ」

優勝は紅花で決まり武術大会は終了した。

その夜は大宴会が開かれた。星空の下、たき火を皆で囲んで料理を食べて飲み明かす。はしゃぎ、笑う人を見れば俺も楽しい……ただ隣に狛がいなければ。姿が消えたと思ってたら、宴会にはちゃっかりやってきた。

「がははは！ まあ飲め飲め小僧」

杯に注がれた酒を俺は飲み干した。狛に返杯し礼儀はつくす。

「ところで小僧、賞金が出たらどう使うつもりだ？」

「黄虎だ！ 名前くらい覚えろ、まあ特に決めちゃいない……」

（いやまてよ、どうせならいっそのこと……）

俺はある事を思いついた。

「そうか、まあ無駄遣いはせんことだな、いざという時に無いと大変だぞ」

「ちっ！ 師匠と同じ事いいやがる」

俺は少し不愉快になった。

「かかかか！ 年長者の言葉は素直に聞いとけよ……あと小僧、国宝って何だか知ってるか？」

「……知らん、姫に聞いたが教えてくれないし見たこともない」

俺は嘘をついた。

「ふーむ、お姫様だけが知っているか……あちこち探しても見つからんわけだ」

「ん、なんか言ったか？」

「いや気にするな、邪魔したな俺は寝る事にする」

狛は横になると、すぐに寝て鼾をかき始めた。やかましいので俺はその場を離れて寝る事にした。

宴は終わり皆が寝静まる。今は楽しい夢の中、たとえわずかな安

らぎでも無いよりはまし、そして災いは音を立ててやってくる……  
ザツ、ザツ！ ガチャ、ガチャ！

曇り空の早朝、姫が眠る倉の前に人が集まっていた。そいつらは武装した山賊達百人。その中の一人が乱暴に扉を叩く。

ドン、ドン！

「なあーに、もう少し寝かせてよ」

眼をこすりながら不機嫌な姫が出てきた。

「わりいな姫さん、こつちも用があるんでな」

にやけた顔の貉が言った。姫は周りを見渡して言った。

「……ふーん、逃げ場なしね。ずいぶたくさんの手下を紛れ込ませていたんだ。ご用はなにかしら？」

「国宝とやらをよこしな！」

「まわりにあるけど、あなたには見えないでしょうね」

「？」

「金、銀、玉石でお腹はふくれないし、奪い合いになって戦の元よ。それで壊れちゃったら元も子もないのにねーくすくす」

「わからねー何が言いたい？」

「国に大切なのは民よ、民あってこそその王よ、『民』こそが国宝なのよ」

少しの間貉は考えこんだ。

「……ご高説はどうでもいいが、ようは形ある宝物は無いわけだな  
？」

「そうねーくすくす」

「なるほどわかった。だが俺達にとつちや『金』が宝だ。あんたと民をさらって売り飛ばす事にしよう」

村々の拉致事件の犯人は貉だった。手下に合図すると二人の山賊が姫に近づく。

「こつちにこい！……ぎゃー！」

俺は倉の陰から踊り出て一人を切り伏せた。もう一人は緋蓮が刺し貫き俺達は姫の左右を固めた。山賊達は剣を抜き一斉に身構える。

「動かないで！」

いつのまにか狼の首には輪縄がかけられていた。少し引つ張るだけで絞め殺せるだろう。紅花が後ろから霊符を使ったのだ。そして山賊達は逆に囲まれてる事に気づいた。師匠、熊青、黒蘭が隊伍を組んで現れ退路をふさいでいた。

「もう逃げ場はないわよ、降参しなさい」

「がははは！ 国宝という餌につられて罠にかかったのは俺達か、だがな姫さん、悪党に情けをかけると酷い目にあうぜ それ！」  
狼が首にかけられていた縄を引つ張った。

グン！

「きゃ！」

紅花は力負けして引きずられる。

「手を離せ紅花！」

手放すと狼は縄を手繰り寄せ取った。

「これは使えるな、お前ら足止めしとけ！」

「へい親分、いくぞー！ おりゃー！」

山賊達が一丸となって襲いかかってきた。その間に狼は縄を使い倉の上に登り、更に木の枝に投げ縄を放ってひっかけた。

「そりゃー！」

狼は縄にぶら下がり勢いよく倉から飛ぶ。振り子になった巨体が味方を蹴散らしていく。

「ぐわっ！」

「うおっ！」

「げふ！」

狼は着地すると暴れながら囲みを破り逃げ出した。山賊達も崩れた囲みに殺到する。敵味方入り交じつての乱戦になった。

「まずい！ 黄虎はやつを追え！」

「わかつてますよー！」

とは言ったものの俺は身動きがとれなかった。山賊達はよく統率され二人一組でかかってくる。俺は倒すのに手こずり時間がかかった。

「仕方ない『反地』！ どわあー！」

この技は氣を足に集中させるまでは縮地と同じ、違うのは大地の氣と反発させ飛び上がる事だ。問題は方向と高さを自分では決められず、俺はしばらく蚤のみのように跳ね回っていた。

「ぜえー……ぜえ……なんとか囲みを抜けたか」

「貉はるか遠くに逃げていた。」

「ちっ！ 今度は縮地かよ、氣を練るのも疲れるつうーの！」

愚痴をこぼしながら俺は地面を駆ける。追いかけてこは意外に早く終わった。貉が突然止まったのだ。

「さあ試合の続きといこうぜ、決着をつけよう」

「威勢がいいな小僧、だがなこちとらまともにやり合う気はねえー」

「どういう意味だ？」

「それはな」

貉は懐から何かを取り出す。それは褐色の柘榴石ガーネット。側にあった二つの窪みに石をはめ込んでいった。すると石が光輝き地面が揺れ始めた。

ゴゴゴゴ！





うせ鬼獣に敵うものはない！　がはははは！」

師匠と俺は仲間達の所に戻った。

「どうなった！」

「山賊どもは片付けもつした。戦の用意も整ってござるー！」

「よし！　鬼獣退治を始めるぞ！」

「おおー！ー！」

皆盛り上がっていた。師匠はあちこちに指示を飛ばしている。

（嘘だろ？　あんな化け物と戦うなんて無茶だ！　勝てっこない！）

「あのうー……俺は何をすれば？」

「黄虎は外氣を溜めてる！」

「ええー！　それは無理っすよ」

外氣法は自然のあらゆる物から氣を集め、数倍の力を得ることが出来る。ただ、自分の氣ではないから扱いにくく、外氣を体内で維持するのは大変だった。俺も修行したが上手くいった試しがなかった。

「そりゃー外氣使えばあの化け物でも倒せるかもしれないですけど、俺の方が先に死んじゃいますよー！　めんどいから逃げましょうよー」

もう一つ問題があった。外氣を制御できないと自分の身体に跳ね返り最悪の場合は死ぬ、だから俺はこねた。

「いいから黙って……」

いらつく師匠と俺との間に姫が割って入ってきた。俺は近くの丸太に座らされた後、姫が両手を拭いてくれた。

「黄虎、巻き込んでごめんね。無理しなくてもいいからね」

そして竹の皮に包まれた握り飯が渡された。見渡せばみんな飯を食っていた。俺も腹が減っていたのでかぶりつく。

パクパク

すると今度は紅花がやってきて焼き魚を差し出す。

「これでも食べて気合いれなさい、黄虎はやれば出来るんだからガツガツ

「う、美味しい」

喉がつまりそうになった時、蘭から竹筒が投げ渡された。

「そら、漢を見せなよ!」

冷水をグビグビと飲んだ。

「よっしゃー! やってやるぜー!」

俺は立ち上がり駆けだしていった。

「くすくす、男の子ってほんと単純ねー」

「母さんが言ってた通りね。男は料理とおだてに弱い」

「それがいいのかもね」

笑う三人娘を見ながら白狼は頭をかいていた。

## 15 決戦

「く、糞！ こいつら！」

狼は苦戦していた。なにせ大量の矢を雨あられと浴びせられては無理もない。

階段式の客席は幾つかに分かれ櫓うぐいすになり、武器庫にもなっていた。師匠は武術大会の裏で戦の準備をしていたようだ。尖った丸太に車輪をつけた破城槌が突っ込んでいく。

「そりゃー！」

ドカン！

勢いよく鬼獣にぶち当たったが、傷一つつかなかった。

「皮膚に皮骨は頑丈か、だが押されるな押し返せ！」

師匠が檄を飛ばす。火矢も含めた攻撃で鬼獣はひるんでいた。

「ちいー！」

狼が鬼獣を反転させた。しなつた尻尾が破城槌を叩き壊し味方も吹っ飛ぶ。

「うわあー！」

「前衛は後退！ 怪我人は更に後方へ！」

前衛が下がると今度は投石機が攻撃を始めた。

「撃て！」

ヒュン！ ヒュン！

「えーい、次から次としつこい！」

狼はかなりいらだっていた。ここまで抵抗されるとは予想外だったのだろう。気構えの点では師匠が勝っており指揮にゆるぎがない。それでも鬼獣は強かった。

「焼き払え！」

鬼獣が火を吐いた。

「あんなのありか！」

俺はおもわず口にした。これはみんな死ぬ！

「来靈壁！」

紅花がありつたけの靈符で防御壁を築いた。見えない壁が炎を防ぐ、靈符も焼かれて保たないかと思つたが火は収まつた。鬼獣にも疲れが見え始め、鈍くなつたように見えた。

「好機！」

ここで仲間達は一気に攻める。俺は外氣を溜めるだけで精一杯で動けず、はやる心を我慢してなりゆきを見ていた。

ギュン！ ギュン！ ギュン！

ドス！ ドス！ ドス！

ウギャー！ フギャー！

投げ槍が刺さり鬼獣は悲鳴をあげた。やつたの熊青、槍に氣を込めて投げつけ硬い皮膚を破つた。熊青は氣を知らなかつたので師匠と俺から習つた。武芸の才は元々あつたので飲み込みは早く、かなり強くなつてしまつた。俺も負けてらんねー！

次に動いたのは蘭。同じく氣を込めた矢を、信じられない早さで放つていた。

「糞！ 糞！ ふん！」

狼は必死になつて矢を叩き落としていた。自分が狙われては鬼獣を操つてる暇はない。師匠は攻撃の手を緩めない！

「紅花！」

「はい！」

ビリッ！

なんと紅花が自分の服を破つた。

「うおおおー！ー！ー！」

一瞬、俺は興奮したが中に旗袍ドレスを着こんでいたのでがっかりした。紅花は破つた服を鬼獣の真上に放る。よく見ると裏地に何か描いてあつた。

「大靈符か！」

それはでかい物を扱う時に使う。符から出てきたのは尖つた巨岩、

落ちて当たればただではすまない。

ドーン！

「畜生……！」

狼は強引に手綱をさばいて岩の直撃だけは避けた。それでも鬼獣は腹に深傷を負いふらついていた。

「ゼー……ゼー……ん？」

狼は師匠を見て、目を見開き畏怖する。

「奇門遁甲……経穴三六五……正経十二経脈、奇経八脈……流れ溢れる！ 喝！」

師匠が真言を唱え終わると巨大な光剣が現れた。それは鬼獣の背丈より高く大きい。

『氣光剣』 師匠の究極奥義だ。それが今振り下ろされた。

ズバツ！

双頭の一首を切り落とすと鬼獣は横に倒れていく、そのまま狼にも斬りつけた。

（決まった！ なんだ案外たいしたことなかったな、俺の出番は……なにいいー！）

……チヂチヂチ

なにかが擦りあつてる音がしていた。狼はやられていない。よく見れば奴も小さい氣光剣を繰り返して防いでいたのだ。迫り合いは双方の内氣が尽きた時におわった。

「ふー……ふー……やるなおっさん。だがな此奴は死なないぜ！」

倒れた鬼獣の頭に狼は近づき柘榴石を引き抜いた。そして今度は紫水晶アメシストをはめこんだ。

ブォー……！！

鬼獣は息を吹き返した。腹の傷は消え、失った首も生えつつあった。

「こいつは不死身でな、生命石さえあれば何度でも蘇る」

（……しかし首を全部落とされたら流石に死ぬ……外氣はやばい、

あの小僧仕留めておくか)

貉は鬼獣に刺さっていた槍を引き抜き俺に投げつけた。外氣溜めに集中している俺はかわせない！

16 神獸

俺は思わず目をつむった。

ドスッ！

（あれ？ 痛くねえ）

槍の穂先は俺の眼前で止まっていた。よく見ると青銅の盾に槍が刺さっていた。

（紅花か……あれ？ あいつ靈符使い切ってたよーなー……まあいや礼を言おう）

「ありが ゲフッ！」

「こつち見るな莫迦！」

殴られながらも俺は見た。紅花は下着姿だった。

（そうか、旗袍まで靈符として使ってくれたのか、あ……）  
しゆるしゆる

俺を殴った弾みで胸に巻いていた晒がほどけていく、紅花の胸がはだけた時、俺は震動ショックを受けた。

「ばっ、爆乳！」

（……俺は思い違いをしていた。紅花は爆乳を隠す為に晒を巻いていたのだ。理由は……俺から嫌われるのが怖かったのだろう）

そう考えると思えば当たる節はいくつもあった。俺が近付くと逃げたり、厠でもないので突然いなくなったり、旅での帳幕の占有……人知れず溢れる胸を押さえ込んでいたのかもしれない。俺は素直に詫びた。

「わりいな紅花、気を遣わせちゃまって……すまん」

（実際、巨乳を見るだけなら姫ので慣れた。そもそも俺が貧乳好きなのは俺だけの女……いや母親が欲しいからだ。赤子が乳をもらっているのを見ては羨ましく思っていた。俺には母がないから……）



意気消沈……溜めた外気が体から逃げていく。俺は制御を失敗し膝を落とし両手も地につけた。

「がははは！ なにやらやる気を無くしたようだな、今二人まとめて踏みつぶしてやる！」

ドスン！ ドスン！

鬼獣の足音と死が間近に迫る。しかし俺は力が入らず、紅花は胸を手で隠したまま固まっていた。

（畜生！ これで終わりかよ！ 死んじまうのかよー！ 動けよ俺！ ……あれ？）

俺は心の中で悪態をつきながら、ふと顔を上げると紅花の下半身が目に入る。そして穿いている物に釘付けになった。

三角の布……ひだひだと刺繍……いや！ それよりなにより何で肌が透けて見えるんだー！？

女の胸ばかり気にしてた俺には衝撃だった。下着を見てこれほど興奮するとは思わず、性衝動シキドウが全身を駆け巡る。

この時、鬼獣の足は俺達の真上にあり、踏みつぶされる寸前だった。

「死ね！」

「アレがなんだか分からないうちに死ねるかー！」

生きたいと願った時、周りの景色が止まった。そして、たくさんの光の粒が現れ四方、八方から俺の身体に入ってくる。

（内気……外気でもない……ただ……心地いい……）

俺は意識を失った……。

「黄虎殿ー！」

「紅花ー！」

二人は悲痛な叫びをあげていた。

ブギャー！

ところが光の球が突如現れ鬼獣は後ずさった。光球は大きくなり天に昇る柱になった。

曇り空が裂けて青空が広がる。その神々しき光は遙か彼方で目撃されていた。

東では崇められ、西では怖れられ、北に住む者は不愉快になり、南に住む者は不敵に笑った。

やがて光の柱からなにかが出てくる。その前に鬼獣は貉を振り落とし一目散に逃げ出した。鹿の角に輝く鱗、爪を持った黄金の蛇。

「黄竜！」

皆がその名を口にした。

「神獣転身……成ったか」

白狼はほっとしていた。そしてあたりは閃光につつまれる。

ピカッ！……………ドゴーン！

逃げていた鬼獣は落雷に撃たれた。黒こげになり、よたよたしながらもまだ動いていた。黄竜は空を翔けぬけ鬼獣に追いつくと、首を咬み千切り体を爪で裂いた。

バキッ！

とどめに頭を噛み砕き殺した。黄竜は楽しそうに空をかけまわり、しばらくしてから地表に消えた。

俺は目を覚ました。

「……………いててて……………あれ？ どうなったんだ？」

身体は痛くて動けない上に裸だった。なんとか顔だけ動かして見ると空は蒼天、辺りの木々は暴風被害にでもあったかのように倒れていた。

木柱や木板が見えたので廃屋にでも落ちたようだった。

そして側に髪は下ろした裸の紅花がいた。

「黄虎、大丈夫？」

「どうやら生きてるみたいだな、助かったのか？」

状況はよくわからんが危機はさったらしい。

「黄虎ありがとう……………」

紅花は片手で俺の頬をさすり、顔を近づける。

「はっ！ そうだ！」

「な、なに！」

「紅花！ お前が穿いてるソレをくれー！」

紅花がワナワナと震え始めた。これは怒りを爆発させる前の前兆だ。

口走ってから、はっと気づく。

（あれ？ 俺……やっちゃまったかな？）

「このド変態がー！」

バチン！

「オゴツ！」

俺は気を失った。

「はあ……はあ……」

狼はしぶとく生きていた。追っ手に隠れながら逃げていた。

向かう先は根城にしている小屋、鬼獣を使い高木の上に建てて迷彩を施してある。誰にも見つけられないはずだったが……

「なんだこりゃー！」

たどり着いた狼が目にしたのは床板だけで、守りの手下もいなかった。狼はあぜんとして座り込んだ。

小屋を破壊したのは鬆獅狗、繭姫の依頼で根城を壊滅させた。密偵も兼ねていた俠達は村々で情報を集め、それを元に小屋を探しだし強襲したのだ。鬆獅狗は守っていた山賊達を一蹴すると盗品を根こそぎ奪いとりに去った。

「がはははは！ そうかやられた、やられた。あの姫さんたいした玉だ。『民が宝』とほざいていたが金もすっかり盗りやがった」

狼は胡座をかいて膝を叩いて笑っていたが、やがて寝てしまった。

「……うーむ、生きてるようだ」

おれは床位ベツトの上で目覚めた。病衣を着せられた体には治療靈符が貼られていた。起き上がると同時にあつもの糞が差し出された。

こうして紅花に世話を焼かれると殴られても文句は言えず、俺は頭が上がらない。食べてる間、紅花は戦いの終わりを話してくれた。

「ようは黄虎が竜になって鬼獣を倒したのよ」

「気を失ってたからおぼえてねえーな」

「でも黄虎のお陰で都は大盛況よ、復興資金も集まったから城や家の建築でどこも大忙しよ。後、一緒に戦った人達に、姫が官位と賞

金を授けてるわ」

「紅花は授かったのか？」

「たくさんいるからまだよ、それに姫が『黄虎が治ってからにしましょ』って言ったから私達は一番後になるわ」

「そうか……」

（となると、その前に準備しないとな……極秘裏に）

俺にはある計画があった。紅花に悟られないようにさりげなく話題を変える。

「ところでこの肉上手いな、何の肉だ？」

「あんたが倒した鬼獣の肉よ」

「……」

習わしで強い獲物を食べれば強くなると言われてるから当然なのだが、俺としては食う気が失せた。

「……じゃ寝るわ」

「わかったわ、何かあったら言ってね」

紅花は食器を片付けて帳幕から出ていった。俺は氣を練り治癒力を高める。とにかく早く治して動きたかった。

（情報も仕入れないと、詳しい商人を探そう）

翌日、姫や熊青が見舞いに来てくれた後、おれはこっそり帳幕を抜け出した。紅花がきても怪しまれないように？ 廁？の文字を木札に書き置きした。紅花が言った通り都は活気にあふれていた。

賞金が出回っているので景気はよく、鬼獣が倒された事が瞬く間に知れ渡って、行商人をはじめ人が都に押し寄せて来るとも聞いた。

（結局みんなが望むのは平和なんだよな、これで女子も増えるだろ  
う。よしよし）

俺は路地裏の商店街を巡りある商人に会った。茶髪の縮れ毛（天然パーマ）に灰色の瞳の西欧人。

通り名は駒鳥、西欧国では？くっくろびん？と言いつらい。

「ハイ、イラッシャイ！」

「……女の下着を扱ってると聞いたが？」

「パンティね！ お兄さんも好きものね」

皮袋からぱんていとやらを取り出して俺にみせてくれた。形は同じだが紅花が穿いてたようなものは見当たらない。

「透けてるやつはないのか？」

「オー！ お兄さん通ね」

今度は懐ふところから商品を出した。

（……そんなとこに隠してんのかよ）

「ソーリー、これは売れないね。透かし編みとても貴重ね、ワタシ本国でこのレース売るつもりあるよ」

駒鳥の喋り方はどんどん変になっていったが、俺は気にせず質問した。

「どこで手に入れたんだ？」

「この国のお姫様、繭姫様デース！」

（……姫が作ったのかよ……）

軽い衝撃を受けたがなんとか俺は立ち直った。

「まあいいや、欲しい物は別だ……なんだが、これで足りるか？」

俺は意識が戻った時に、手に小さな宝石をなぜか握っていた。

「オー紫水晶！ お釣りが払えないね！」

「釣りはいらん、他にも色々教えてくれ」

「オーケー！ お兄さんのお名前は？」

「黄虎だ」

俺は駒鳥と握手をかわし契約した。これで準備は整った。

俺の体も癒えて官位が授与される日がきた。仮宮殿の中に仲間達が集まった。式典用に誂えられた立派な衣装がきつい。俺は堅苦しいのは嫌いだ。だが紅花から強引に着せられた。

姫は正式に即位して玉座に座っている。ただ王と呼ばれるのを好まず、今まで通り『姫』と呼ぶことになった。

最初に師匠が呼ばれ大將軍を拝命した。鬆獅狗は遠吠駅長官になった。紅花は都衛官、黒蘭が巡察官として親父達の下につく、国の内外を監督する重役だ。

熊青と緋蓮は官位を辞退した。他国人が上では華人は反発して従わないからだ。そこで姫は新たな役を作って二人に与えた。武士と衛士だ。姫の護衛と伝令、権限は少ないが直属になるので低い身分ではない。任にあたり熊青は条件を一つだけつけた。

「拙者はいずれ華の国を去るでござる。その時はお役ご免いただきたい」

姫は快く了承した。

最後は俺で前に進む。皆、玉帯や印綬そして金袋を賜り褒賞されていた。俺もそれなりに期待していたのだが……師匠が俺の前に来たときに嫌な予感がした。師匠は木片を読み上げた。

「黄虎を三年間の労役に処す」

「へっ？」

一瞬何を言われたか分からなかった。

「……と言いたるところだが、黄虎に恩赦を与える。詳しくは姫様が話される」

俺は姫にくっついてかかった。

「姫どうゆうこと？ 俺って罪人？」

「黄虎は覚えてないと思うけど、黄竜が王家の祖廟（霊を祀る建物）を壊してしまったの」

（……たしか意識が戻った時、何か壊れた所にいたようなー）

「心苦しいんだけど、黄虎の手柄を差し引いても罰しなくちゃいけなかったのよ。ただこれは表向きの理由だけどねーくすくす」

（表向き？）

「だから『雑用官』として三年間は労務についてね」

「あーもう、いらいらする。姫、ほんとの事言っていない？」

「そうねーくすくす」

紅花が俺をすごい剣幕で問い詰める。

「おう〜こ〜！ あんた私から逃げようとしたわね！」

ギクッ！

「なっ、なんのことだ？」

（ば、ばれたのか！？）

「こいつが白状したわよ」

「黄虎サーン、すみませんバレました！」

「こ、駒鳥！」

「あんた！ 私に黙って西欧に行こうとしてたわね。なにが『西欧おなごが俺を呼んでいるー！』よ。ふざけんじやないわよ！」

完全に俺の計画はばれていた。一応、姫との約束は果たしたから別な国へと一人旅をしたかった。気づかれないよう注意して行動したはずだった……あっ！ 思い出した……美麗さんが言っていた。？女の子はね、頭の天辺からつま先まで男の子を見てるわ。だからどんな些細な事も見逃さないから隠し事はできないの？

俺は甘かった。

「黄虎さん、また今度お詫びシマース！」

ドサッ！

駒鳥は俺が頼んでおいた旅道具を置いて逃げ出した。



「あつ！　こら、まてー！」

俺もついでに逃げようとしたが  
ガシッ！

「甘いわよ黄虎！」

「ぐわっ！」

背中から体を紅花に抱き留められた。しかも爆乳を押しつけられ俺は苦しい。紅花はもう胸を隠してはいなかった。

「黄虎、巨乳も慣れれば天国だよ」

今度は前から姫が抱きついてきた。

「どわっ！」

「なーに、すぐにあたいの胸に夢中になるよ」

黒蘭は俺の腕に巨乳を押しつける。

「嗚呼、蘭！　お前もでか乳か！」

三人娘が俺を取り囲みいちゃついていると、うなり声が聞こえてきた。

「ガールルルルル」

（親父二人が俺を睨んでるー嫌だったら娘達を止めるよー）

緋蓮は仮面をつけ声を殺して笑っていた。

「いやはや羨ましいかぎりにごさるな、黄虎殿……ぷぷぷぷぷ」

「熊青先生、笑いながら言ったら嫌みですよー」

どうしてこうなった？

「村に帰ってえー……」

遊俠愛歌　第壹章　終

## 1 壺

華の国の南、密林の中の洞窟。

『……猊が敗れた』

『あいつの事はどうでもいい、問題は神獣だ！』

『なに我ら九黎族くわいが束になってかかれば一溜まりもあるまい』

『同じ事をぬかした奴が昔もいたな、しかし我らは負けたではないか』

『……』

皆が黙りこむ中、座の中央にいる者が口を開く、若い男の声だった。

『鬼獣はまだ足りん。戦を起こすには準備がいる、今は動くべき時ではない……かといって放置するわけにもいくまい？』

全員が頷くと、

『……を差し向けよう』

族長の言葉に皆頭を垂れた。

時は初夏、空は快晴、心も青……

「疲れたよー！ 休みてえーよー！ 遊びてえーよー！」

「……兄貴ーまだ始まったばかりかですよ」

そう言ったこいつの名は蒼蠅そうげつ、俺の舎弟に強引になった男だ。俺につきまとい何度追いついても寄ってきた。根負けした俺は姫に頼んで文官として雇ってもらった。

蒼蠅は発明が得意で、道具の図面を書いては俺に作らせている。ついでに新しい文字まで生みだし役に立っている。唯一の欠点は女より力がないことだった。

俺の仕事は壊れた王廟の再建作業、俺達以外の人夫はなし……他は街作りで忙しかった。

(都から逃げようとした俺に対するあてつけなんだよなー)

掘っ立て小屋でも先祖を祀る事は重要だと紅花から散々言われた。

「おこたると悪霊がでるわよ!」

そんな事あるわけがねえーと思いつつ、俺は王廟の残骸を片付け  
ては地面をならしていた。その後、蒼蠍は水杭を地面に立て位置決  
めをしていく。

ガツツ!

鋤すきが固いものに当たった。

周りの土を掘り俺はそれを取り出した。

「壺?」

「青銅で出来てますね、御札が貼ってある」

「なんだろうな?」

「墓所は別な場所ですから骨壺ではないですね。おそらくは祭具なの  
で後で埋め直しましょう」

「売っちゃだめか?」

「兄貴!……姉御に怒られますぜ」

「うー、だってよう財布の紐は紅花に握られてて、小遣いがないん  
だぜ!たまには派手に遊びてえーよー!」

俺が都から逃げ出さないように、必要な時にしか金はもらえない。  
仕方ないので俺は都に美少女が集まり育つの待つつもりだったが、  
それも紅花にはお見通しでいつも監視され、ちよっかいは出せない。

「じゃーこれが終わったら熊青さんも誘って飲みに行きましょう。

おごりますから我慢してくださいよ」

「あんがと、お前いい奴だなーしくしく」

思わずうれし涙をこぼす。

ボタツ!

「あっ!」

俺は気が緩み壺を落としてしまった。はずみで御札がはがれ、蓋がとれた。中を見たが何も入ってなかった。

「壊れてないから、大丈夫でしょ」

「そうだな仕事に戻るか……！」

突然、景色が反転した。白が黒へ、黒が白へ 俺は怖気立ち冷や汗をたらした。我に返った時には蒼蠅が目の前にいた。

「兄貴どうかしました？」

「お前なにも感じなかったか？ いや……気のせいか」

辺りを見ても特に変わった様子はなく、恐ろしく感じたことが嘘のようだった。

（疲れてるかなー）

？ふむ、素質はありそうじゃな？

（幻聴か！ 耳までおかしくなったのか？）

？聞こえるか、こつちじゃ？

振り向いた先に姫がいた。

## 2 悪霊

「姫？」

俺は変だと思った。今の時間なら姫はあそこで仕事してるはずだし、いつもの服を着ていない。

「あつ！」

それよりも俺は本能がうずいた。目の前にいる姫は胸がない！

「うおー！姫ー！ 実は貧乳だったんだね！」

両手を前に伸ばして突進する。

スカッ！

「え？」

ズデン！ 俺は前のめりに転けた。

「やれやれ、神人かと思って見れば盛りをついた雄ではないか。まあ妾の色香に惑わされるのも無理からぬ事。おほほほ」

蒼蠅は腰を抜かして怯えていた。俺がすり抜けたのだから無理もない。

「あ、悪霊！」

「むっ、失礼な奴じゃな！」

「お、お前は一体何者だ！」

「その方達から名乗るのが礼儀じゃ」

むかつきながらも俺達は名乗った。

「よく聞くがよい。姓は姜、名は松。神農の子にして炎帝なるぞ！

妾にひれ伏すがよい！ おほほほ」

俺は蒼蠅と顔を見合わせてうなずき、作業を再開した。

「とにかく今日の仕事を終わらせちまおう、さぼると紅花が恐いからな」

「そうすね」

「こらー！ 妾を無視するでない！」

「あーわかったわかった、後で被ってもらってからそれまでじっとしてろな、悪霊」

「妾は悪霊ではない！ 帝じゃ！」

「そんな与太話信じるわけないだろう」

「ですね、偉大な炎帝が壺に封じられてるはずはない」

華人なら誰でも知ってる事で、神農は毒と薬を見分け、その子炎帝は松明を発明し人々を助けた。ただ俺達が生まれる前の昔話だ。

「……だから……それは……色々あって」

「いいからもう黙ってる！」

「むきいー！ー！」

五月蠅くて仕事はさっぱりはかどらなかつた。

午飯（昼飯）ついでに俺達は城に戻る事にした。自称炎帝の松もついてきている。よく見ると宙に浮いているので人間ではないのは確かだった。時折俺の近くによってきては絡んでくる。うざくて仕方ないがつかみようがないので、一先ず紅花のところへ向かっていった。

内城は来た頃とはうって変わって立派な宮殿と門も建てられた。楼閣もあるが、出入りするのには姫と一部の者だけで他の女達は絶対に近寄らない。アレがいるので俺もなるべくは避けたい場所だった。

宮殿を囲むように家屋があり仲間達が住んでいる。俺達は紅花がいる厨房に向かった。

「あれ黄虎？ 戻ってくるの早いんじゃない……さぼったわね」

「違う！ ちと変な奴が……って、いねえー！」

側にいたはずの松がいなかった。蒼蠅が首を振ったのでいつまにかいなくなっただらしい。

「やばい！ あの姿でうろつかれたら何が起きるかわからん」

俺は慌てて探しに行こうとしたが止められた。

「まって！ 何があったか話して」

「仕事をしてたら地面から壺がでてきて、姫そっくりな……」

俺は持ってきた壺と御札を置きいきさつを話した。聞き終えた紅花は胸から白紙を取りだして霊符をつくり始めた。筆をとり氣をこめ一気に書き上げた後、それを折っていき形を作る。

「姉御、かつこいい……」

ちなみに蒼蠅は紅花に惚れてるが、俺に遠慮してか口には出さない。

くつついてもらった方がありがたいのだが、俺の自由は遠かった。

「これを追っかけて探しなさい、幽霊に反応するから」

「わかった」

折り鶴の霊符は宙に浮かび動き始めた。俺達はその後を追った。

### 3 喧嘩

内城は四里四方に広がり建物が増えた。生活は便利になったが、人との連絡がしづらくなった。

最初は銅鑼や太鼓で集合の合図としていたが、音がやかましいので敵襲以外は使わない。

今は木札などに文字を書いて回し読みするか、立札に貼り付けたりしている。

俺は姫の偽者が出た事を書いて貼り付けたが……遅かったようだ。

空籠を背負った臣下の行列が俺の側を通る。

「どうしたんだ？」

「姫様からありったけの食い物を探ってくるように言われましてー」

「……そいつは城に忍び込んだ偽者だ。他のやつにも伝えてくれ」

「はあ？ ……わかりました」

姫そっくりの悪霊と言われても頭を疑われるだけだ。あえて本当のことは言わなかった。

俺だつていまだに信じられねえー！

(それにしても、悪霊って物は食えるのか?)

どうでもいいことを思いつつ走る。蒼蠅は俺についてこられず途中で脱落、歩きながら他の場所へ知らせに行った。俺は緋蓮に出くわした。

「なんて言うか……姫見なかったか？」

「偽者なら見ました。仕留めようと思いましたでしたが逃げられました」

「おお！ 一発で見破ったのか？」

「はい、でも大した事ではありません」

流石は姫の従者といったところか、と思っただら



「アレを見れば誰でも気づきます」

「……たしかに」

指さした先には芋や玉米トウモロコシなどが食い散らかされ、それが転々と道なりに続いている。折り鶴も後を追うように動き出した。

「おっと、じゃ行くわ」

「ご一緒します」

緋蓮も後ろからついてくる。悪霊探しも終わりが見えてきた。

（これだけ悪食だと行くところは一つしかないな）

折り鶴は俺が思った場所で止まった。大食堂にやつはいた。用意されていた皆の午飯を食い荒らし、甜食デザートの桃の蜂蜜漬けを食べていた。

その様子を震えながら見ている本物の姫が立ちすくんでいた。

（やばい、あれ姫の大好物なんだよなー、しかも姫の席で食ってるし）

バクバク

松は周りを気にせず食べ尽くし姫に言った。

「その女侍者、かわりを持って」

プチッ！ 姫が切れた。

「ふざけんじゃねえぞ、この女！」

「なんじゃと！ 妾にむかってよくも」

「やかましい！ この落とし前きっちりつけさせてやる。！」

「（作者規制）」

（こ、怖いよー……鬼獣より怖いよー美麗さーん）

こんな姫は初めて見た。普段は冷笑はするものの、お淑やかで誰に対しても優しくかった。嗚呼そうか……これが裏の顔なんだ。

？表裏一体、陰陽互根、清濁併せ呑め？

師匠の教えの意味が少しわかった気がする。つまりこれは見なかつた事、聞かなかつた事にして忘れよう。うんうん……ってできるかー！

俺は女の見方が変わってきていた。今までは紅花しか近くにいなかったが、都にきて姫と蘭と一緒にいる時は空気が変わる。張りつめてる時もある、和やかな雰囲気の時もある。

(女同士って敵なのか？ それとも友達？)

女の二面性を間近で見ると恐くて仕方ない。俺は女性に安らぎを求めようになっていた。

思い浮かべるのは育ての親の美麗さん。師匠に羨ましい、と言ったら変な顔をされた。

「お、お前はあいつの本性を知らんからな……女に理想を求めるのは止めておけ」

狼狽えた師匠を見て女の謎は深いと思った。

物思いにふけっている間に食堂は目茶目茶になっていた。

姫が食器を松に投げまくる度に体をすり抜けて、割れ物が散乱していた。

「どうした、もう終わりか？」

挑発された姫は松に殴りかかった。当たらないと思っていたら

ぼか ぼか ぼか

「いた！ いて！ 痛い！ 何をするのじゃー！ このおー！」

松も負けじとやり返す、傍から見れば微笑ましい姉妹喧嘩に見えた。

## 4 尋問

二人が殴りあっているとき少しづつ顔が腫れてきた。俺は止めようとしたが先を越された。

「姫様！」

「こら！ やめなさい！」

緋蓮と紅花が二人を羽交い締めにした。

紅花は滅多に着ない巫女装束になり松を捕まえていた。

（触れるのか？ そういや符術士は巫女だったな、悪霊の天敵だ）

「離せ！ 妾を離せ！」

「いいかげんにしないと、被うわよ！」

暴れる松はこの一言で怯えおとなしくなった。紅花は松をしめ縄でぐるぐる巻きにし、霊符を貼りつけた。これでひとまず騒動は収まった。

（やっぱり紅花もこわいよー……これからはおとなしい女を捜そう）

ガチャ ガチャ ザツザツ

結局、みんなで食堂の中を片付けて午飯は作り直しになった。他の臣下達も手伝ってくれた。

姫の方針で位の分け隔てなく、食事は食堂で一緒にとることになっていて、これは皆に評判が良かった。食事が終わるといつもの面子と松だけが残った。

この場にはいないのは二人で熊青は街で仕事、師匠は遠吠駅に遠出してた。

松にたいし紅花が尋問を始めた。

「で、あんたは一体なんなの？」

「だから妾は炎帝じゃ！」

「そう、じゃーだったら壺の中にいたの？」

「それは……その……」

(うわー紅花に詰問されたら、洗いざらい白状させられるぞ)

俺も容赦なくやられた口なので悪夢が蘇る。案の定、数刻ともたず松はへるへるになっっていた。

「……ようするに死んでも黄泉に行かず、悪食で人様に迷惑ばかりかけていたので封じられたと……」

「……英雄伝説が崩れていくー」

「なにをー！ 松明<sup>たいまう</sup>をつくってやった恩を忘れおって！ 少しぐらい食べたくらいで妾を悪者にするでない！」

「その松明も食べ物焼く時に偶然できたんでしょ？」

「うっ……」

ここで黙っていた姫が聞いた。

「で、こいつ私の先祖なわけ？」

「姜姓を名乗ってるし、姫そっくりだし、触れられるし間違いないわね」

「なんじゃ妾の子孫だったのか！ だったら先祖を敬うがよい」

「やかましい！」

びによーん

「ひゃめれ、なにをひゆる」

姫が松のほっぺをつかみ引っ張った。食べ物の恨みは恐ろしく、姫はまだ怒っていた。

「もういいわ紅花、悪霊は被ってちょうだい」

「こりゃー……」

こっして騒動は終わりを……迎えなかった。

「……それがねえー壺や御札を調べたけど、私も見た事もない図柄や文字があつて特別みたい。それと実はさっき被ってみたけど、こいつ消せないわ」

「ひー！ お、お主、い、いつのまに、勝手なことを一化けてでてるぞー！ だからやめい！」

(いやすでに化けて出てるし 紅花で駄目となると……)

「美麗さんしかいないか」

皆が頷く中、松がしゃべった。

「まで、待つんじゃない！ 妾には大事な役目がある、それある限りは黄泉にはまだ行けん！」

「役目って？」

「それはまだ言えん、時が来たら話す」

言い訳としては苦しいが目が本気だったので、俺は助け船を出すことにした。

「師匠が帰ったら決めよう」

「そうね、ただし今度何かやったら母さん呼んで被ってもらおう」

「……わかつたのじゃ」

やれやれ、これで一件落着いたと思ったら熊青が帰ってきて

「なんと！ 姫殿は双子だったでござるか！」

「違うわよ！」

「違うのじゃ！」

(すみません熊青先生、もう説明する気力がありません)

「いや！ そんな事よりも大変でござる！」

(こつちはたいした事はないのか？)

「冀きの国の使者がやってきたでござる！」

「なんて言ってきたの？」

「それが……」

熊青が俺を見ながら言いよんだ。嘘がつけない男が困っていた。

「気にするな、今更何を聞いても驚かん」

姫からも促されて熊青は口を開いた。

「冀の国の皇子が姫殿に求婚してきたでござる！」  
「なんじゃーそりゃー！」

## 5 使者

冀<sup>き</sup>の国は華の国の隣で東にある……それしか俺は知らん。

「昔は同盟して一緒に戦った国だ。先王はすでに亡くなり、皇子の歳はお前らと変わらんだろう」

夜、遠吠駅から帰ってきた師匠が言った。

「うむうむ惜しい男を亡くしたのぉー」

「黙れ！ あの戦はお前のせいだ！」

少し前、師匠は松を見るなり喧嘩になった。

「おお、白狼の小僧かえ？ 老けたのー」

「まぁーっー！ 何で出てこられたー!?」

「時が来たからじゃろうな、軒猿<sup>のきね</sup>の息子に封をとかれたのも縁じゃろうて」

師匠は俺をにらんだが、昔話を続けた。

「神農様の御世<sup>みよ</sup>は華の国が中心になって治まり世は平和だった……だがこいつが王になった途端、諸国と部族達は反乱を起こした。莫<sup>バ</sup>迦<sup>カ</sup>な貢ぎ物ばかり要求したせいだ！」

「たかが山海の珍味くらいでー……」

「節度があるだろうが！ 毎日牛のように食う奴がどこにいる！」

拳げ句に『調理がめんどろじゃー！』とぬかして村ごと焼きやがって！」

聞かされてる俺達は頭が痛くなっていた。師匠の言ってる事は本当だろう。松に手を焼かされて思い知った。

（はぁー……世の中は知らなくていい事がおおいなー）

「そして鬼獣大戦がおこり、たくさん人間が死んだ。二年で大戦は終わったが、そこには勝者も敗者もなく荒れ果てた国だけが残った……二十年前の話だ」

「それでこの女はどうなったの？」

「松は暗殺されたはずなんだが………どういっわけか幽霊になって若返り、食べ物食い漁りさまよっていた」

「えっへん！ 秘術じゃ」

「いはるな！ それで当時の古老達や美麗の師匠が松を封じた。詳しい事は儂もわからん」

「こいつどうしますか師匠？」

「儂にも判断は下せん。美麗に文を送って相談する他はない。しばらくは紅花が見張っておけ」

「はい」

「それよりも姫様、求婚をどうなさりますか？」

皆の視線が姫に集まった。

「そうねー王族としては受けるべきなんだろうけど、生憎あたしは王様としての自覚が足りないの………好きな人もいるしねー、くすくす」

姫は俺を見ながら言った。照れ隠しに頭をかいていたら紅花から腕をつねられた。いてえー！

「とにかく断るにしても、まず使者に会いましょう。黄虎、明日呼んできてくれる？」

「わかった」

姫も落ち着きいつものように笑っていた。

次の日。

「いねえーってどういっことよ？」

いるはずの街の宿にはいなかった。宿屋の主人に聞いたたら『都を見てきます』と言ったらしい。

(いいかげんな使者だなあー、まあうちの姫も似たようもんだが)俺は城に戻るわけにもいかず顔立ちを聞いて探す事にした。

(面長の長髪………そして垂れ目か)



都は来たときはうって変わり、店が建ち並び人がこつた返ししていた。これで人捜しするのはきつい、と思っていたら

「はい、そこのお姉さん遊びませんか？」

俺は目を見張った。往來のど真ん中で泡ナメバ？してる奴がいた。茶屋や酒店あたりでするのが普通、誰もが不審そうに見るか笑いながら側を通り過ぎていった。

(あれあの顔？ あいつもしかして)

俺は声をかけてみた。

「あの……」

「あーすみません、男の方は御無用です。やはり女の子！ できれば乳は小さい方が いや！ 貧乳はゆずれない！」

「やっぱりそうだよなー！ ……って違う！ あんた冀の国の使者か？」

「そうですが、あなたは？」

俺は姫の使いと言って名を名乗った。

「……ああ、あなたが……なるほど」

使者は俺を探るように見た。

「おっと失礼、我は飛燕ひえんと申します」

「じゃー城に案内するぜ」

「あー黄虎さん、その前に都を案内してほしいのですが？」

「……うーん少しくらいなら、遅れるとまずいからな」

「それではお願いします」

俺は安請け合いました事に後悔した。なにせ雑用官として街の手伝いもやってると、知り合いが多くてあちこちで呼び止められる。

「黄虎兄ちゃん、遊んでー！」

「おっ！ 野菜もつていきなー」

「虎ー！ こっち手伝ってくれよー」

ことわりながら街中を移動するのは大変だった。

「みんなから慕われてますね」  
そう言った飛燕は掴みどころがなく、抜け目がないようだった。  
俺が説明できないような場所も細かく観察していた。街作りは姫と  
師匠が進めているので詳しい事は知らない。飛燕はしきりに頷うなずいて  
は感心していた。

案内の後、女の好みで意気投合し酒店で飲んでいたら夕方になっ  
てしまった。

飛燕から『明日あらためて登城します』と言われ別れた。  
城に戻った俺は紅花から大目玉をくらった。

## 6 謁見

次の日、謁見場で使者を迎えた。そこに飛燕が現れ一礼し書状を差し出す。

師匠が受け取り玉座の姫に手渡した。

「……………」

姫は一瞬怒ったような顔をしてから考えこみ、皆に書状を見せた。

「おいおい飛燕、ふざけてんのか？」

俺は少し腹が立った。書かれていた事は『使者に聞いて』の一文だけだったからだ。舐めるとしか言いようがない。

「口を挟むな黄虎！ 姫様よろしいでしょうか？」

俺を怒鳴った師匠は姫となにやら小声で話をしていた。

「……………そっかーなるほどね、くすくす」

「まず間違いないでしょう」

（どうなってるんだ？）

近くで聞いてた紅花が熊青や緋蓮に何やら説明し驚いていた。ちよつと待て俺にも教える！

「使者殿、失礼した」

「いえいえ」

「それじゃー質問させていただくわ、冀の国の国力と兵力はどれくらい？」

（おいおい姫もどうかしてるぜ！ それって国の秘密だろ？ 言うわけないじゃん……………って、え！？）

「直轄村は六十五、最大動員兵数は二千人弱といったところですかね」

「華の国よりは上ね、昔は三百村以上を治めていたけど今じゃ三十

村にも満たないわ。兵力は遠吠駅と合わせても千人くらいね」  
「万の敵に攻められたら一溜まりもないですね、ははははは」  
「そうね、くすくす」

(いったいどうなってるんだ?)

俺だけ蚊帳の外、いや段々わかかってきたような気がする。俺と同じ位歳……使者とは思えない態度……それは冀の国の……

「ですが貴国には黄虎さんがいる。百万の軍勢に匹敵しますよ」  
「どうですかな？ 屁垂れへたがいくらいても役には立ちませんよ」

師匠から悪口を言われ俺はむかついた。  
それを見て飛燕が笑いながら言った。

「黄虎さん、將軍は驕らないよう戒めてるだけです。ほんとは貴方を頼りにしてるのですから」

ゴホン！ 師匠がわざとらしい咳払いをした。

「まあ世間話はこれ位にして本題に入りましょうか？」  
「そうですね」

ドカ、ドカ！ バタン！

けたたましい靴音が響いて扉が開いた。血相を変えて入って来たのは蒼蠅。

「謁見中すみません！」

「かまいません、言いなさい」

「敵襲です！」

場は騒然となった。

だいぶ前、九黎族も騒ぎがあった。

「……の長が、出陣しただと!？」

「はい」

「勝手なことを！ 引き連れた兵の数は？」

「それがお一人で向かわれ、お供が慌てておいかけております」

「功名心にかられたか、まあ奴は俺が族長であることを快く思っていないからな」

九黎族はその名の通り九つの部族からなる。元々は敵対していたこともあり部族間のいざこざは絶えない。

今の族長が各部族を力で治めてるにすぎなかった。

現在の総兵力は二万、それと鬼獣を持っていた。この圧倒的兵力でいずれは全土を支配しようとしている。ただ族長は慎重に事を進めていた。それだけ神獣の力を恐れていた。

「まあいい、痛い目を見ないとわからんだろう」

「はっ！ 何もしなくてよろしいですか？」

「……の奴は？」

「すでに動いております」

「ならばよい、偵察だけは怠るな」

（華の国の戦力を見るにはいい当て駒だ。死んだらそれまでの事）  
族長は非情だった。

バキッ！ ドガッ！

「おらおら、出てこい黄竜の化身！ 雑魚じゃ相手になんねえーぞ」

そいつは衛兵を殴り倒しながら宮殿に向かって進んでくる。

よほど腕に自信があるのか剣を持っていない。それでいて五つある城門の内、三つも破られていた。

氣の技？遠眼？でそいつをよく見ると、浅黒い肌に虎と熊をつなぎ合わせた毛皮を着ていた。長髪も無造作に束ねてあるだけで、まさに野蛮人と言えた。

「もてるでござるなー黄虎殿。城まで押しかけてこられるとは羨ましい」

「冗談言ってる場合か熊青！ 第一、男に迫られたって嬉しくも何ともねえー！」

俺は城壁から眺めていたが、衛兵では埒があかんで打って出ようとした。

「まて黄虎」

意気込んでいた俺は師匠に呼び止められた。

「あんなのちよちよいと片付けてきますよ、氣を見りゃ貉より弱い」

「だからお前は屁垂れだと言っんだ。都全体を氣で感じてみる！

他にも敵は入りこんである。目の前の敵だけにとらわれて民を守る事を忘れるな！」

「うっ……押忍」

「敵は四十人ほどか……しかし攻めてきた割にあやふやな行動だ。となれば打つ手としては……」

師匠は少し考えこんだ後皆を集めた

「作戦は………以上だ。持ち場につけ！」

「はい！」

一人残った飛燕が白狼に願いでた。

「將軍、我にも何かお手伝いさせてください」

「いや、貴方様に何かあつたら大変な事になる。お気遣いは感謝するが……」

「大丈夫ですよ、この程度で死ぬなら我もそれだけのこと、貴国とよしみを結ぶ価値もないでしょう。ただそれはお互いに言えますけどね」

飛燕はにやりと笑った。

「では……をお願いする」

「命令口調でいいですよ、了解しました」

飛燕も消えて白狼は一人ごちた。

「どいつもこいつも鼻っ柱の強い若造共だ……まあ儂も昔はそうだったか、ふっ」

「どうした？ 俺様に向かってくる奴はもういねえーのかー！」

そいつは倒れた衛兵を積み上げて腰を下ろしていた。俺は石を投げつけてやった。

バシッ！ そいつは片手で石を受け止めた。

（ふーん、少し氣をこめたんだが効果はないか）

「てめえーいい度胸だ、名を名乗れ！」

「雑兵に名乗る名はない」

「この俺様を雑兵だとー！ ふざけるなてめえー！ よく聞け俺様は九黎族が長の一人、黍きびの百足むかで様だー！」

「長おさねえー、田舎もんの野蛮人が何しにきた？」

「黄竜の化身とやらを血祭りに上げて、この華の国を滅ぼしやるのよー！」

「お前程度じゃ無理だな、もっと強いやつを呼んでこいー！」

この一言で百足の様子が変わった。

「……こ、この俺様があ野郎に劣るだー！ 成り上がりの族長なんぞ糞食らえ！ いまに俺様が取って代わってやるー！」

（なにやら気に障ったようだな、こつも短気だと釣りやすいが……馬鹿だ）

「その族長とやらなら俺の相手になりそうだな、お前はさっさと消えろ、しっしっ！」

「て、てめえー殺す！」

俺は逃げだし百足は後を追ってきた。

（師匠の作戦はまどろっこしいなあー……他はどうなってるかなー？）

そして、黍の兵達は必死になって百足を捜して……いなかった。

「女ー！ こつちこいやー」

「きゃー！」

「おらおら金をださんかい！」

「うわあー！」

「ガツガツ、これつめえーな」

都ゴロツキに流氓が入り込んでいた。



## 8 迎撃

「やめんかー！ 馬鹿者ども！」

黍の連中を叱りつけてる初老の男がいた。名は羽虫はむし、百足の守り役だった。

「若を連れ戻すのが役目だー！ 目立つ行動をするな！」

ドーン！ ドーン！

太鼓が街中に鳴り響き敵襲を知らせる。家々の扉が一斉に閉められ通りから人が消えた。

周りを見れば街並みが変わり、幾つかの通り道が無くなっていた。

「これは閉じ込められたか！」

そう気づいた矢先に バタン！

「突けー！ー！」

「そりゃー！ー！」

熊青率いる棍棒小隊が突然現れ、黍達を襲った。

「ぐっ！」

黍達は最初はやられていたが反撃した。

バキッ！

棍棒をつかんで奪い取りへし折った。

「くっ！ 力は強い、皆の衆退却でござるー！」

熊青は来たとき同じく、からくり扉を使い退却した。羽虫は後を追ったが間に合わず扉はびくともしなかった。そして扉の上には尖った竹や釘が並べてあり乗り越えられない。

悔し紛れに扉を叩くが、休む暇は与えられなかった。

今度は頭上から矢が飛んできた。

屋根の上から黒蘭の弓隊が次々と矢を放つ、盾を持ってない黍達  
はいいように撃たれていた。

「糞！ 皆逃げろー！」

羽虫が指示すると黍達はバラバラに逃げだした。

「痣一つつかないなんてね、頑丈ーだわさ。鏃やじりをつけたい所だわ」

黒蘭達の矢の先端は丸くなっており殺傷力はない。熊青も槍は使  
わなかった。全ては白狼の作戦で、殺すつもりが無かった。

「……奴ら散らばったようね。こっちも隊をわかるよ、上手く追  
込みな！」

「是はっ！」

黒蘭は空を見ながら部下に指示をだす。敵の動きを知らせてくれ  
る幽霊が空にいた。

松が文句をたれながら手旗で合図していた。

「つたく、妾がなぜこんな事をせねばならんのじゃー！」

「ここまでおいでー」

「待ちやがれー！」

俺は百足を挑発しながら山に向かっていた。そこは兵達の訓練場、  
まずは俺は一本丸太を渡し、そのまま助走をつけて飛んだ。百足も  
続くが

ドボン！

百足だけ水堀に落ちた。俺ははい上がってくるのを見てから、木  
に登り木々を梯子で渡り、張つてある網に飛び乗って下におりた。

そして通り道、俺は縮地を使って前に進んだ。

百足がそこを走ると

ドガツ！ ガン！ ドコン！

もの凄い音が響いた。百足が仕掛けに引っかかったのだ。

そこは丸太の振り子が左右から絶え間なく襲ってくる場所だった。

ここは一番厳しい訓練路線で、走破できる者は少ない。

俺や熊青くらいかなあー。

「おいおい、もろに丸太をくらってるよ……生きてるかな？」

俺は気の毒に思うも、がっかりした。師匠から最大の敵と聞かされて警戒していたが、これだけ間抜けだと拍子抜けもいいところだった。

「ウゴオーー！」

百足が雄叫びを上げ、丸太をもともせず突進してくる。

「信じらんねえー！ 無茶苦茶頑丈！」

氣を使ったようには見えず、俺は呆氣にとられていた。

そして百足が俺の眼前にまで迫る！

「わりいな、ここで終わりだ」

俺は手に持っていた縄を離した。

ドーン！

上から丸太箱が落ちて百足を捕らえた。

「捕獲完了、さて報告にいくか」

師匠の作戦は殺さず生け捕る事だった。

その後どうするかは知らんけどねー……ドガン！

「えっ？」

「フー！ フー！ ガアー！」

「ありえねえー！ 檻をやぶりやがった！」

百足は目の色が変わり何を喋っているかわからない。

「こいつは……やばい！」

俺は縮地全開、必死で城に逃げた

## 9 料理

街中の黍達も野獣と化していた。熊青と蘭が追い込んで捕まえた途端、怪力を発揮し逃げ出した。

そして人梯じんていを組んで屋根の上に次々登っていった。別な場所に移動して暴れ始めた。

路地裏の商店街。

「ハイ、いらつしゃい！」

「ガー！ 金目のもんだせ！」

「オー！ 強盗さんね、金物ねー今あげます よっ！」

駒鳥は背中から細身の剣を取り出し突きだした。

ドスツ！ ドスツ！ ドスツ！

黍達を刺しまくる。

「グワツ！」

「商人なめたらあきまへんでー旅で襲われて当たり前やから、弱い奴などおまへんわ！」

言うだけあつて駒鳥は強く一人づつ確実に倒していった。

また都の自警団も活躍し、別働隊が到着した時には片がついていた。

「出番がありませんでしたわね」

「おー緋蓮、おひさしぶりデース！」

「はい、あなたに教わった剣は役だってますよ。ありがとう」

「そう言われると気持ちー少し複雑ですなー貴女を売ったワタシとしては……」

「今となって感謝してますよ。孤児の私が生きてこられたのも、姫様に出会えたのも駒鳥のお陰ですよ」

「そうですね、でわー今度なにか買いにきてくだサーイ！」

「はい」  
緋蓮はくすりと笑った。

「歯がゆいでござるー！ まったく当たらん！」  
熊青達は追いかけたものの黍達に反撃されていた。攻撃が全て空を切り苦戦していた。

黍達は猿のようにすばしこかった。

「こんなの初めてだわさ！ ちい！」

蘭も矢を躲かわされ焦っていた。しかし突然黍達の動きが止まった。

「つきききき……ふがつ、ふがつ！」

「どうしたでござるか？ ……くんくん」

美味そうな食べ物の臭いが辺りに漂ただよい食欲をそそる。

黍達は一斉に臭いの元へと向かった。臭いは城からきていた。

「やるわね姫、うふふ」

「紅花も腕を上げたわね、くすくす」

二人が料理を作りあっていた。互いにゆずらず、絶品が大卓に並べ続けられている。

飛燕は試食して一言。

「美味すぎますね！」

「こりゃー！ 妾にも食べさせる！」

「あんたが食べたら意味無いでしょうがー！」  
涎を垂らした松は注連縄しめなわで縛られていた。

ブン！ ブン！ ブン！

巨大な羽団扇はうちわを白狼は仰いでいた。

「飛燕こつちも手伝ってくれ」

「はい、それにしても將軍、敵は殺さないんですね？」

「皆に実戦経験を積ませるのが今回の目的だ。一部のはねつかえりを全滅させて九黎全体の恨みを買うのは得策ではない。それと儂に

も考えがある……」

「なるほど深いですね……しかし奴らに食わせるにはもったいない」

「仕方あるまい。いいからもつと仰げ」

「……わっかりました」

飛燕は地味な作業が嫌でたまらなかった。やはり戦いたいと思っていた。

「これも修行だと思いなされ、上に立つ者なら尚更……畜生共が釣られてやってきたな」

黍達は料理を手当たり次第に食い散らかし始めた。

箸も使わず手で口に運び、奪い合いもする。白狼達が近くにいるも気にしなかった。

やがて……

「ぐー……ぐー……」

眠り薬入りの料理を食べた黍達は眠ってしまった。白狼達は黍達を鎖で縛り、青銅製の檻に入れた。これはそう簡単には壊れない。

「こりゃー！ 妾まで閉じ込めてどうする！」

「ちっ！」

舌打ちした姫は松を開放した。松は料理の残り滓を恨めしそうに見ていた。

「あとは黄虎だけか……これは一筋縄でわいかんか」

白狼は二人の氣を感じ取り状況が分かっていた。

「はあ、はあ、何てしぶとい！ もう本気でやるしかない！」  
百足は縮地も使わず俺に追いついてきた。氣が使えないくせに頑強なのだから始末が悪い。

師匠には『殺すな』と言われていたが、俺は戦うことに決めた。  
「兄貴ー！」

蒼蠅が城壁から声をあげ、ある所を指さす。

「そうか！ よしわかった」

俺は楼閣へと急いだ。入り口から中に入り、アレを避けながらぐるぐる回り外へと出た。

百足は悲鳴を上げ正気に戻ったようだった。

「うぎゃあー！ なんじゃこりゃー！」

ついできた百足は葉っぱまみれになり、体中には虫が這っていた。

気持ちの悪い虫達は女達に嫌われていた。それは白い蚕かいこ。

姫曰わく『金の成る木』、これから絹がとれるのだから当然だ。

西欧では大人気でひきもきらずに売れまくる。儲けた金は国庫に入るのだから、養蚕を成功させた姫は凄い。パンテ……いや編み物まで作るのだから偉い。

ただ、蚕の世話は俺がほとんどやってるんだけどねー……虫の相手は空しいぜ、ふっ。

自嘲しながら俺は縄を使って楼閣を登っていた。

百足も蚕と桑の葉を振り払い登ってくる。一番上の三層目で俺は中に入り縄を斬った。

落ちて倒れた百足に俺はまた箱を落とす。蚕の餌箱だ。

(同じ手にひっかかるとは……やっぱり馬鹿なのか?)

いつのまにか蒼蠅が下に来て俺は焦った。

「蒼蠅！ そいつに近付くな！」

「大丈夫つすよ、六丈（約15m）の高さから落ちて無傷なわけがない。」

そして兄貴が作ったこの箱は白樫で堅い、杉とは違いますよ」

「そいつは普通じゃない！」

「えっ!?!」

「なめんなー！」

雄叫びをあげて百足が箱を破った。

「うぐっ」

「調子こいてんじゃねえぞてめえー」

百足は蒼蠅の首根っこを片手で掴み上げ殴った。

ボカツ！ ボカツ！ ボカツ！

「ゲホッ！」

「この程度で血を吐くなんざあーてめえ脆もろすぎるぞ、黍の下っ端にも劣るわ！」

百足は俺にも眼をとばした。

「華の国のやつらはせいこい手しか使えねえーのか、あん？ 興きざめざめもいとこだぜ！」

そして蒼蠅は蹴られた。

「なにもできねえー弱カスは死ね」

足蹴り続ける百足を見て俺は切れた。ブチッ！

「おりゃー！ くたばれえー……んごっ」

俺は楼閣から飛び降り百足を踏みつぶした。

それでも何事もなかったかのように百足は立ち上がった。

「ようやくやる気になったか、だがそれが命取りだー！」

百足の右拳が風を巻いて顔面に迫る！ 俺は避けない。

ギン！



「うおー！ー！ー！　いてえー！ー！　熊も倒す俺様の拳がー！  
てめえー何しやがった！」

返事代わりに俺は百足を殴りつける。

「ぐふっ！　げほっ！　ごほ！」

今度は百足が血反吐をはいた。

「なめてんじゃねえーぞ餓鬼！　殺ろうと思えばいつでも殺れるんだ！　師匠の命令じゃなきやてめえーはとっくに黄泉逝きだ！」

硬氣法　『金剛』

氣に怒りの力を加えて全身を極限まで硬くする技だ。今の俺はぶち切れていて威力十分。

俺は蒼蠅を指さして言った。

「こいつはたしかに女よりも力はねえー、だがな物作りでこいつに勝てる奴はいねえー。力だけの馬鹿こそ死ね！」

「……兄貴……げほっ」

蒼蠅は嬉しそうな顔をしていた。

「喋るなじつとしてろ、すぐに紅花がくる」

照れ隠しに俺は百足をおもいきり蹴り飛ばした。

「糞……」

百足は壁に叩きつけられ倒れた。氣を見ればまだ息がある。

凶暴さはまさに百足だが、しぶとさは蜚ヒキフリだと思った。

「黄虎ー！」

仲間達が駆けつけてきた。女三人が先を争いながら俺に向かってくる。

揺れる六つの巨乳を見てると目が回る。

(またかよ……なーんか女同士って時々張り合うんだよなー)

俺は紅花に声をかけ蒼蠅の治療をたのんだ。

そして姫が先につき俺を気遣う。

「怪我はない？」

「うん」

どうやら作戦は上手くいったようだ。

一息ついてふと空を見れば、日は傾き夕暮れ時……夜？ 辺り一面が突然暗くなった。

(おかしい！)

そう思ってお日様を見たら……無い！ よく見ると何かが太陽を隠していた。

それが動き俺を襲って来た！

「危ない！」

姫が俺を突き飛ばした。

ガッツ！

何かが地面をえぐり駆け抜けた。そのままいたら体は切り裂かれていただろう。

姫のお陰で俺は助かった。

バサ バサ

空を見上げると巨大な鳥が羽ばたいていた。

真っ白な体躯に三本足の鳥、その上に乗っていたのは

「ちっ！ 運のいい小僧だ」

「貉ー！ てめえー性懲りもなくー！」

俺は吠えながら身を物陰に隠した。鬼獣、しかも空中にいる相手ではこちらが圧倒的に不利だった。

唯一攻撃できたのは蘭だけだったが全く当たらない。巨鳥の動きが速すぎた。

「がははは！ この『金鳥』にそんなものは通じん  
ブオーーーーー！」

金鳥が羽で旋風を巻き起こした。強烈な風を受けて矢は跳ね返され、楼閣の一部が吹き飛んだ。

中に隠れていた姫は柱にしがみついていたが空中に飛ばされた。

「姫えーーーー！」

叫ぶ俺も地面に剣を突き刺して踏ん張っているだけで精一杯。

(こつなつたら黄竜とやらに成るしかない……って、どうやるんだー！)

「変心……いや変身？」

手足を適当に動かして見たが何も起きなかった。

(あつ！ 思い出した師匠が言ってた)

？神獣転身をするには真摯しんじな心と、もう一つ……？

(……あれなんだっけ？)

「きゃあーーーー！」

考えてる間に姫が落下し始めた。

俺は姫を抱き留めようと縮地で移動したが、金鳥が先に姫を爪で捕まえた。

「ちつ！ もう日が落ちるか……こいつは夜目はきかない。おい小僧、明日の昼までに黍の大将を西華山の山頂に連れてこい！ お前一人でな」

「姫を返せ！」

「がははは！ 明日こなかつたら姫さんの命は無いと思え」  
「 猪は姫を連れ去った。俺は何もできず絶叫した。」  
「 畜生……！」

夜、俺達は軍議場の八卦殿に集まり軍議を始めた。  
皆、暗い表情をしていた。もっとも嘆いたところで姫は帰ってこ  
ない。

それで今後の対策を皆で話し合った。こんな時に頼りになるのは、  
やはり師匠だった。

「よいか、まず現状で何が重要か見極める事だ。黄虎、気づいた事  
を全部言ってみろ」

俺は思いつくままに言ってみたが……的外れだったようだ。

「黍の百足とか言ったか？ あの男は猪にとつて大事な事。事情  
はともかく上手く利用することだ」

「なるほど」

「次に西華山の山頂だが、ここはひらけていて身を隠す場所はない。  
金鳥の餌食になるのは目に見えている。さあ、どうする黄虎？」

「 姫を助けた後、縮地で逃げる！」

「 馬鹿もん！ お前、姫を抱えたまま素早く移動できるか？ 長距  
離を逃げられるか？ 猪も甘くはない、無理だ」

「……うー」

俺は師匠に問答でしごかれていた。

## 12 作戦

「これは黄虎さん一人では無理ですね。我が手を貸しますよ、敵の言うことなど聞く必要もないでしょう」

飛燕が協力を申し出てくれた。言うからには自信があるのだろう、俺はこいつの力を知りたくなった。ただ師匠は断った。

「どうしようもない時にはお力添えいたたく、ただ今はその時ではない」

「あらら残念です。必要な時はいつでも呼んでください」

師匠はうやうやしく頭を下げた。

「それで紅花と蒼蠅には仕事を明日までにやってもらおう。やれるか？」

「やります！」

「やれます！」

「アレは完成したから問題ないな……他の者にも色々手伝ってもらおう」

「俺は何をすれば？」

「黄虎は飯食つて寝ろ」

「えー！ 作戦の打合せとか特訓とかはないんすか？」

「それは朝早くにやる。大事なのは己を常に万全な状態にしておくことだ。寝不足だからといって、敵は遠慮してはくれんぞ！」

「押忍！ 師匠が作戦を立ててくれるから、俺は従ってればいいですね」

「お前なー少しは自分で考えるようにしろ、儂とていつ果てるか分からんのだから……」

「またまたー師匠は四十にもなっていないでしょ、百歳まで生きますよ」

俺は師匠が死ぬなど考えられなかった。

「それにしても姫が心配ですよ」

「それなら様子を探りにあいつを向かわせた」  
「姫そっくりな奴がこの場にいなかった。」

「なぜに妾がこんな事をせんといかんのじゃ！」

不平を鳴らしながら松は西華山へと向かっていた。空を早く飛べる幽霊は偵察にはもってこい、すぐに姫と貉を見つけた。

「何をしとるんじゃ、あやつら!？」

松が不思議がるのも無理はない。姫は縛られてもおらず、それどころか貉に料理を振る舞っていた。

「さあどうぞ」

「ただくぜ……うむ、美味しい。久々にまともな飯を食った」

「材料や道具があればもつと良い物つくれるけど、あんたるくなもの食べてないわね。無理してない？」

「敵の姫さんに心配されるとは思わなかったぜ。捕らわれてそう落ち着いていられるのはなぜだ？」

貉は質問で返した。

「黄虎を信頼してるからよ。それにね私は運がいいの、命を何度も狙われたけど助かってきたわ。くすくす」

「となると悪党の俺は分が悪いか……だがやらねばならんな」

「聞くけどあんたも九黎なの？」

「ああ一応な……だから百足の大将は助けにゃならん。あの小僧も仕留めんとな」

「ふーん、そのわりには嫌々やってるように見えるわ」

「いいからもう寝ろ！」

貉は凶星をつかれ不機嫌になった。

「そうするわ、少し離れるけどいい？」

「ああ……」

松はこっさり姫に近付いた。

「何をやっておるのじゃ？」

「わからない？ 敵の情報を聞き出してるのよ。せつかく捕まったのだから、この機会を利用しないとね」

突然現れた松にも驚かず姫は淡々と答えた。

「喰えん奴じゃなあー、まあそのくらいでなければ国は治められん。問題ないなら妾は戻るぞ」

「じゃーまた後でねー」

笑う姫に首をかしげなら松は去った。姫には白狼の作戦が大体読めていた。

次の日の早朝、俺は師匠に叩き起こされた。俺は寝付きはよいが朝は弱かった。

顔を冷水で洗い体をほぐした後、木剣を持って外に出た。待っていた師匠に一礼して構える。

形稽古に考えるは必要はなく感じるままに向かっていた。本気でやっても師匠に当たりはしない。師匠は俺の攻撃に対して払い・返し・抜きなどで反撃してくる。

その都度俺は技を体で覚えた。いつかは強い師匠に追いつきたいと思っっている。やり返してえー！

### 13 西華山

稽古の後は食堂で朝食を取った。紅花が作ってくれた。

徹夜で作業をしたはずなので、俺は体を心配したが

「気が張ってる時は動いて方が楽よ、でも今からお昼まで眠るわ」  
そう言って紅花は寢所にむかった。

朝食を食べ終える頃に師匠が作戦を話し始めた。

俺は茶を飲みながら聞いていたが……ゲホツ！ 危うく吹き出す所だった。

俺はとんでもない作戦に文句をつけた。

「また無茶苦茶なー！ 一つ間違えると俺が死んじゃいますよー！」

「他に良い手があるなら言ってみろ！ この程度の事で死ぬ？ 笑  
わせるな！ お前の親父や儂はな……」

説教昔話されると精神的にきつい、それと姫の命がかかっているから選択の余地はなかった。

「はい、すみません。やってみせます！」

「よし！ 後から援護してやる」

皆が席を立つ中、蒼蠻だけが椅子に座ったままだった。疲れ切つて寝てしまつたらしい。俺は毛氈を掛けてやり外に出た。

師匠から紅花が作った霊符を受け取り懐にしまう。これは俺にでも扱える符だった。そして目の前には大きな葛籠くわろうがあった。

蓋を開けて見ると、猿ぐつわをされ鎖で縛られた百足がいた。

蓋をしめ俺は葛籠を背負った……うう、糞重い疲れるうー！

「行きます」

「おう！」

師匠に挨拶して俺は西華山へと向かった。今日の天気は快晴無風、



作戦にはもってこい。

「これなら、何とかなるかな？」

俺は山を登り、中腹で一休みした。景色を楽しんでる余裕は今はなく、俺は山全体から氣を感じ取ってみた。

「……やっぱりいたか」

俺は氣を引き締めてから登り、森を抜けて山頂についた。そこは見渡す限り草原で、身を隠せる物は何もない高原だった。貉は遠くで金鳥に乗り、姫は側にいた。

「貉ー！ 姫を返せ！」

「小僧！ 百足の大将はどうした？」

「この中だ、今見せてやる」

俺は葛籠を下ろして蓋を開けた。貉は金鳥で舞い上がり中を見た。

「それ以上近寄るな！ 姫を返すのが先だ。さもないと」

俺は靈符をちらつかせ、首をかつ切るような仕草をして脅した。

「ちっ！ いいだろう。だがな、お前も百足の大将をここまで運ん

でこい、妙な真似はするなよ！」

「わかった」

貉は下に降り、俺は葛籠から百足を出して肩に担ぐ。

姫がこっちに向かってくるのと同時に俺は歩き始めた。

俺は足下の草を踏みながら一歩ずつゆっくりと歩く。

ゆったりと時間が流れ、姫が目の前まで来た。

「うまくやるがよい」

俺は松に無言でうなずき 縮地！

一瞬にして貉の目の前に移動し、百足を放り投げた。

そして靈符を使った。

ボン！ 辺りは煙に包まれた。

「目くらましときたか、そんなの羽ばたき一つで消し飛ばしてくれ

る！……大將がいたか」

貉は仕方なく金鳥を降りて百足に近づくと……

「……こいつは蠟人形……炭？ まさか！」

辺り一面に白い粉と炭塵が舞い、灰色の雲のようになっていた。

そして、百足の人形が小さな火を発した時

ドゴォー……ン！

## 14 裏山

対鬼獣兵器 その壱 どんより雲。

師匠が考案した兵器だ。小麦粉と炭塵を空中にまいた後、火をおこせば爆発する。

着火の仕掛けと人形は蒼蠅がつくり、紅花が霊符に粉を集めた。実験した時も凄かったが、今回はそれ以上の威力があった。

俺は間一髪で爆発から逃げおおせた。

(だ・か・ら！ 俺が死ぬって言ったんだけどな……)

愚痴をこぼしながら俺は姫の元へ急いでいた。

この場にいたのは松で、姫とすり替わっていた。

パチパチ……ブスブス

焼け野原になった高原に金鳥の死体があった。生命石も破壊され完全に息絶えていた。

こうなると鬼獣も復活は出来なかった。

もぞもぞ

金鳥の翼が動いたと思ったら貉が現れた。

「ゲホ、ゲホッ！ ゴホッ！」

「ほう、生きておったか。翼を盾にしたようじゃな」

「ゴホッ！ お前、姫さんじゃねえーな、何者だ？」

「妾のことか？ 通りすがりの美少女じゃ、おほほほほ！」

「ふざけるな！ ……なっ！ 化け物！」

貉は腹立ちまぎれに松を殴ったが、すり抜けたので驚いた。

「むっ！ こんな可愛い化け物があるか！ ほれほれ」

松は貉をからかって遊び始めた。

「姫ー！ 無事か？」

「大丈夫よ黄虎」

松とすり替わった姫はあまり動かずに上手く隠れていた。

俺は氣を感じ取って姫を見つけた。ただ再会を喜んでる暇はなかった。

……ガサガサ

「もう近付いてきてる。行こう姫」

「ええ」

貉も馬鹿ではない、手下を山に伏せていたのだ。中腹で休んだ時に敵の場所はつかんでいたので、やり過ぎしながら裏山へと向かう。

俺一人なら突破も出来るが、姫を守りながらとなると心許ない。

それで逃げる作戦を立てた。裏山は崖になって足の踏み場もない。

その分敵の警戒も薄く逃げ道としては良かった。俺はもう一枚あった靈符を取り出して使った。

ボン！

ハングライダー  
滑翔翼

現れたそれは鳥の形を模していて翼がある。これに乗り滑空して麓まで降りるつもりだった。

これは鬼獣の骨とかを使い、蒼蠅が作ったのだが……なんで俺がいつも実験台にならなくちゃいけないんだー！

「いたぞー！」

「ちっ！ 見つけたか、姫いくぞー！」

「うん」

俺達は滑翔翼につかまり崖から飛び降りた。

ぶわっ

落下は一瞬だけであとは気流に上手く乗れた。滑翔翼は空を飛んでいる。

何本か矢が飛んできたが風に邪魔され当たらない。

敵もやがて見えなくなり、俺達は安全に飛行していた。

「いい眺めね」

「ああ」

上空からの景色は最高で逢い引きにはもってこいだった。虹が見えると逃避行したい気分になった。

「このまま遠くへいけたら……！」

バサッ！

羽音とともに黒い影が通り過ぎた。俺と姫に緊張が走る。

ギャー！ ギャー！ ブギャー！

「金鳥だと！？ 倒したはず……まさか！」

貉の姿はなく、しきりに鳴き叫んでいる。

「どういうことだ？」

「黄虎、あれ！」

「なっ！」

バサ……バサ……バサッ……バサッ！

俺達は驚いた。四方八方から金鳥が現れたのだから無理もない。

（鳴いていたのは仲間知らせるためか！）

俺達は五羽に取り囲まれた。

## 15 空中戦

金鳥達は攻撃してこなかった。

バサッ！

そしてもう一羽がやってきた。それには縮れ毛丸頭アフロヘアになった狍が乗っていた。

「小僧！ よくもやってくれたな、今ぶち殺してやる！」

「ちっ！ おっさんもしぶといな、九黎族つてのは厄介だ。ただ俺達には出さないほうがいぜ、百足とやらが大事ならな」

「脅してるつもりか？ 大将なら見捨てることにした。もう遠慮はしねえー……ただ姫さんだけは助けてやる。飯をもらったからな」

「そうかい！」

俺は滑翔翼を傾け急降下した。狍と喋っていたのは時間稼ぎ、あともう少し……。

「なめるな、やれ！」

六羽の金鳥が次々襲いかかってきた。滑翔翼の翼だけを攻撃してくるのは墜落させるのが狙いだろう。本当に姫だけは救う気らしく、俺としては好都合だった。

「姫、揺れるけど我慢してくれよ！」

「ええ！」

滑翔翼を操りながらでは攻撃はできず、まして金鳥の方が遙かに早い。それでいて俺は金鳥の爪を上手くかわしていた。

スカッ！

俺は襲ってくる瞬間に金鳥の羽の下に移動していた。すると羽ばたきで飛ばされてしまう。崩れた体勢を直すのは大変だが被害は受けない。

落ち葉斬りの応用。

舞い落ちる葉を斬るときに、風をおこせば葉はなびくだけで斬れ

ない。師匠は目をつむって連続斬りをやるのだからすごい。葉の十文字斬りを見たときは人間業とは思えなかった。

今は俺もやれるけど……熊青が槍で一突き三枚刺しをやつてのけて、その技もかすんでしまった。くそうー新たな芸を磨かねば！

「狼もそれに気づき戦法を変えてきた。」

「下からいけ！」

金鳥は俺達の下に潜ると垂直上昇し嘴で襲ってくる。

「だったら！」

「ドカツ！」

「フギヤー！」

俺は金鳥を靴で蹴りつけた。ただこれは失敗だったようだ。

鶏冠とんかに來た金鳥は逆上し狼の言うことは聞かず、横から俺達を直接襲い始めた。

同時攻撃ではかわしきれず、滑翔翼も壊れたした。

「やがて　ズバツ！」

「きゃあーーーーー！」

「姫ー！」

姫の命綱が切れ下に落ち始めた。

「ちい！」

狼は金鳥で助けに向かう。俺も自分から飛び降りた。直後に滑翔翼は完全に破壊された。

俺は氣を素早く練りある技を使う。

「引氣！」

これは相手の氣を掴み、引き寄せたり近付いたりする技だ。俺は全身から氣を發して姫の氣をつかんだ。もの凄い勢いで俺は姫に近付いていく　だが間に合うか！

「黄虎ーーーーー！」

「姫は必死に手を伸ばす」

「姫——！ くそう——絶対死なせねえ——！」

地面が見えた時に俺は姫の手を取った。

姫が握りかえした時、時間が止まった。

（これはあの時と同じ！……）

意識を失う寸前、師匠の言葉を思い出した。

？真摯な心、そして愛？

お互いを強く思い合う二人が神獣になる。

俺達は閃光に包まれた。



## 16 朱雀

光は焰ほのおの球となり姿を変えた。  
深紅の鳥が長い尾羽をなびかせ空へと羽ばたく。

朱雀

光る火の粉を纏まとい、空を翔る姿は美しく速い。  
貉も金鳥も目がついて行けず、右往左往するだけだった。

朱雀には繭姫の意識があった。

「すごいわ！　すごいわ！　紅花が言った通りね、なんて気持ちがいいんでしょ！　最高ーに感じるわ！　こんな快感は初めてー！」

繭姫は金鳥をみて思った。

「そうね、敵は八つ裂きにしないと、火照る体が収まらないわ。くすくす、くすくす、くすくす……」

巨大な力を手にすれば人は変わる。

繭姫は朱雀の力を使った。黄竜の力が稲妻、朱雀の力は紅蓮の炎だった。

朱雀の体が燃え上がり、口から火弾を吐いた。

ガァー……

断末魔の悲鳴をあげ金鳥の一羽は墜ちた。火弾は速く避ける間もなかった。

「くそっ！　だがこの金鳥も火鳥だ。そう簡単にはやられんぞー！」

貉が合図すると金鳥達も燃え上がる。炎対炎、しかし貉は呆子あほうだった。なぜなら……

「あちち！　あぢぢ！　あぢいいー！　あぢいいー！」

自分が乗っている金鳥も燃えたのだから当然だ。自分自身に火を

放ったようなものだった。狼は転げ落ちた。

バフツ！

『落下傘！ ほんとにしぶといわね。まあいいわ今は金鳥を屠らな  
いと』

朱雀は体当たりを仕掛けた。纏った焔に当たれば消し炭になるだ  
ろ。金鳥はかるうじて躲していたが、朱雀の動きについてこられ  
ず死角をつかれた。

バキン！

朱雀が嘴で金鳥の生命石をうち砕いた。血玉をまき散らしながら、  
また一羽が墜ちていく。

残る三羽は死にもぐるいで反撃してきた。窮鼠猫を噛む、捨て  
身の同時攻撃には朱雀も避けるだけで精一杯になった。

ドヒューン！

そこに大型の矢が飛んできた。

朱雀を援護する矢の数は次第が増えていき、一本……十本……百  
本……たくさん！ 空一面を覆った矢は金鳥に突き刺さった。

対鬼獣兵器その式 『竹弩』

台座に取り付けられた長い竹筒が束になり、空に向けられている。  
そこから矢が勢いよく飛び出していった。それは矢の多連装発射機。

蒼蠅が工夫を凝らし苦心して作った兵器だ。威力・射程ともに長  
弓の上をいく。

白狼率いる軍隊が一斉射を行っていた。

はりねずみになった金鳥が墜ちると大歓声がわき起こった

「凄い！ これは大したもののごさるなー蒼蠅殿」

「ええ、鬼獣を倒したのですからね」

熊青と飛燕は蒼蠅を褒め称えた。

「いや、兄貴にはおよびませんよ、やっぱり兄貴はすげえー！」

蒼蠅は朱雀を見ながら感動していた。そして黄虎との出会いを思  
いだす。

（俺は弱く他人からは馬鹿にされてきた。それでも何かやれるはず  
だと思い、武術会の予選に出た。結果は散々でその拳げ句に猪に引  
き倒された。初めて会った兄貴は俺をかばうどころか、猪に味方し  
た。

俺は兄貴を恨み、無様に負ければいいと思った。だけど……兄貴  
や姉御の戦いぶりは次元が違っていた。俺なんか本戦に出ていた  
ら死んでいたかもしれない。ほんとの意味で兄貴は俺を気遣ってく  
れていたのだ。

そして鬼獣戦。神獣の力を見た時、俺は打ち震え懂れた。それが  
兄貴だと知った時、俺は舎弟になりたくて押しかけていた。断られ  
続けたが俺はあきらめなかった。そして今、惚れ込んだ兄貴の側に  
いられる事が何より嬉しい。兄貴は時々情けないけど、その分俺が  
支えてやらなくちゃと思う……いずれ兄貴は王になるのだから）

## 17 帰城

少し離れたところでは白狼と松が話をしていた。

「朱雀まで現れたか」

「そう驚くことでもないわ、父様が予知されてたとおりじゃ」

「神農様の神託か……」

白狼は顔をしかめた。

「そう気に病んでも仕方あるまい。なるようにしかならんのじゃから」

「黄虎をしごかんな」

「やりすぎると嫌われるぞー」

「かまわん、死なれるよりはました」

「まだ軒猿の事を気に病んどるのか？」

「忘れられるわけがない！」

松はそれ以上は言わず空を見ていた。

「どうやら終わりのようじゃな」

金鳥は竹弩から逃げようとしたところに、朱雀の連続攻撃をくらっていた。火弾に爪に嘴、とどめの体当たりで二羽共絶命した。朱雀は勝ち鬨とぎを上げるように鳴いた。

『力がぬけていくわ……もう少しこうしていたいけど残念ね』

繭姫は地上におりた。

「……ん」

俺は目を覚ました。動こうとした途端、目をふさがれる。

「まだ動いちや駄目！」

「紅花か？ なせだ？」

「姫が着替え中よ」

「あーら、黄虎だったら見てもいいのにね。胸用に作った文胸ブラジャーは興奮すると思っわ、くすくす」

「姫！」

紅花が姫をたしなめた。

(そついや神獣になった後って、すっぱんぼん？……って俺は？)  
股間に手ぬぐいがあった。

手での目隠しが外されると服が投げつけられた。

「あんたも着替えなさい」

見れば幕の囲いから姫が出てくるところだった。着替え部屋が目の前にあった。

この間、師匠は追撃を指示したものの撤回。敵はとっくに逃げだしていたからだ。

それで金鳥の回収を兵達に命じた。鬼獣は肉は食料、骨は材料として使い道があった。

しかし七羽もあるとなると人手が足りない。とりあえず俺達は城に戻って相談することにした。

あれ？ 熊青がない。

「お待たせ申した」

「何かあったのか？」

「これを拾ったでござる」

「卵か？ 変わってるなあ」

「それは金鳥の卵だな、死ぬ間に生んだのだろう」

師匠が言った。

「白狼師、鬼獣は必ず敵になるのでござるか？」

「いや、操るための生命石を埋め込まなければ問題ない」

「それではこの卵、拙者におまかせいたください」

特に反対する者はいなかったが、俺は理由を聞いた。

「手向かう者には容赦はせぬが、生まれてもいない物に手をかけるのが忍びないだけでござる」

緋蓮が大いに賛成したので、熊青がふ化させてみる事になった。

上手くいくかは運次第だそうだ。

帰り道、飛燕が素性を明かした。冀の国の皇子と言われて、今までの態度も納得した。

もつとも俺だけ気づくの遅かったようで、仲間達はとっくに知っていた。

「ようは貴国と同盟する価値があるかどうか、見に来たわけです」

「それで結論は出たのか？」

「はい、華の国とよしみを通じたいと思います。どうでしょうか繭姫？」

「こちらこそよろしくお願いするわ飛燕」

「それでは改めて使者を送りますので色々と相談しましょう。それと求婚の話は無かったことにしてください」

「それは有り難いけど、なぜ？」

「やっぱり貧乳じゃないとー……おつと失言、失礼」

「うんうん、だよなー……って！ いでえー！！」

女としては傷ついた姫から、脇腹をつねられ八つ当たりされた。

その後、俺は女達に絡まれながら内城の門まで帰ってきた。

そこで飛燕も国に戻ると言ったので、別れの挨拶をしようとした

時  
！

ドン！

俺は左右にいた紅花と蘭を突き飛ばした。

「いたた、突然なにすんの　黄虎ー！」

俺の手に吹き矢が刺さっていた。

「か、体が……毒か！」

俺は不覚を取った。神獣になった後の俺は脱力し、氣もしばらく練れない。その隙を突かれた。

「あーはっははは！ ざまあ見やがれ！」

勝ち誇った百足がいた。

「ちっ！ 鎖でぐるぐる巻きにして重しもつけたはずなのに」

「この百足様を舐めるなー！ 関節を外せば簡単に抜けられるわ！ まってる今とどめを刺して うぐっ！」

皆が固まっている中、紅花だけが素早く動いていた。

俺の手に口を当て毒を吸い出し吐きだす、すかさず上腕をしばり毒の回りを遅くした。

そして一瞬で百足の喉を片手で鷲づかみし、つり上げていた。縮地を使ったのだろう。

「毒消しを出しなさい！ 早く！」

「ぐっ！ うぐっ！ げほっ！」

ギリッ ギリッ！

紅花が喉を締め上げているので百足は声もだせずにいた。

「早くだせ！ だせ、だせ、だせ、だせ、だせ、だせえー！」

バシ！ バシ！ バシ！ バシ！

（ありやー対鬼獣……じゃなくて百烈耳光ヒンタ！）

鬼気迫る紅花に百足は手も足も出ない。俺が苦戦したのが嘘のようだった。

百足の顔は原型がなくなるほど腫れ上がって、意識もないようだった。

「紅花、落ち着いて！」

蘭が後ろから羽交い締めする。力が一番あるはずの蘭でも暴れる

紅花を抑えるのは一苦労だった。

「黄虎が死んじゃう！ 黄虎が死んじゃう！ ……えぐっ」  
紅花は半泣きしていた。

（そんな顔すんなつーの、見てる方が辛いわ）

「大丈夫、痺れ薬じゃ、大事には至らぬ」

「えっ！ 本当？」

松が落ちた吹き矢を舐めていた。

「妾を誰だと思っておる神農の娘じゃぞ、毒を見分ける事なぞ朝飯前じゃ！ おーほっほほほ！」

（それにもともと死んでるから問題はないか）

「ただ万が一という事もある。解毒薬の作り方は……」

「ここにある、若を返してくれないか？」

突如現れたそいつに皆が身構えたが、師匠が制した。

「儂は白狼、お主の名は？」

「羽虫」

「これ以上の戦いは無意味だ。引くならば捕らえた者達も開放するがどうだ？」

「若さえ戻ればこちらに依存はない」

「よし」

熊青が百足を担いで引き渡し、薬と交換した。

師匠は羽虫を連れて捕虜の元へと行った。

「なんとか助かったか……な？」

ほっとした所に熊青・蒼蠅・飛燕が俺を取り囲んだ。

俺は力づくで四つん這いにさせられ声を荒げた。

「おい熊青！ これはどういう事だ」

「実はこの薬……座薬でござった」

「……なにー！ー！」



「それで拙者が黄虎殿に入れてあげてあげるでござるよ」  
「うわぁーやめろ！ 自分でやるうー！」  
「兄貴ー体が動かないでしょ、熊青さんに任せましよう……ぶっ」  
「このー蒼蠅ー裏切りものー！」  
「いやいやこれぞ舎弟愛というやつですね」  
「恥ずいって！ 女達もいるんだぞー……っ、じろじろ見るなあ  
ー！」

女四人、興味津々と俺を見ていた。

「はらはら」

「どきどき」

「わくわく」

「……」

緋蓮は例によつて仮面を変面させて赤らめていた。

「せめて場所を変えてくれえー！」

わめく俺に姫が気を利かしてくれた。

「しょうがないなあー紅花、アレ！」

「ええ、招更衣室！」

霊符から着替え部屋が出てきたのだが……

「おお！ 立派な刺繍だなあー蝶や花が綺麗……っ、幕が透け透

けじゃないか！ さっきのと違うー！」

「えっへん！ 自信作の透かし編みよ。熊青とつとやっちやって

「承知つかまつた！」

熊青が俺の？<sup>スポン</sup>子を下げた。

「大丈夫、痛いのは最初だけでござる」

「その台詞はやばいだろー！ ……っっ！」

「でわー力を抜いてえー」

「ぎゃあー……！」

「「「ぎゃあー……」「……」「」」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7508v/>

---

遊俠愛歌

2011年9月25日22時15分発行